

無惨との最終決戦に
うっかり紛れ込んでし
まつたヘタレモブ隊士
の話

Amisuru

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

煉獄さん「心を燃やせ！」 心折杯「お断りだアアアアアアアアアアアア！」

——からの、もうちょっとだけ続いた物語。

01／30：完結に伴い、アンチ・ヘイトタグを削除しました。

目 次

無惨との最終決戦にうつかり紛れ込んでしまつたヘタレモブ隊士の話	——	1
或いは蛇足、或いは救済、或いは尚も終わらない心折	——	21
蟬人間ゝしがみつく者たちゝ	——	39
断髪式	——	65
煉獄に焦がれて	——	87
無慘との最終決戦にうつかり紛れ込んでしまつた茂生大志郎の話	——	111

無惨との最終決戦にうつかり紛れ込んでしまったヘタレ モブ隊士の話

戦う意思を欠片も持つていなかつた訳じやない。

俺は鬼殺隊士だ。鬼によつて身内を殺され、その恨みを晴らすために刀を取つた者だ。

身体を鍛え、呼吸を覚え、最終選別にだつてきつちりと通つた。

階級は下から数えた方が早くとも、鬼の首だつてそれなりに落とした経験がある。

だから今、俺はこの場所に立つてゐる。
その筈、だつたんだ。

鬼舞辻無惨。鬼を統べる者。我らが恩讐の向かう先。

そいつが今まさに、我ら鬼殺隊の手によつて討たれようとしている。
お館様の屋敷が襲撃されたと鴉に伝え聞かされた時は、流石に耳を疑つた。
緊急招集を受け屋敷へと駆けつけてみれば、跡地は既に火の手の中。

屋敷に代わってその地に在るは、血鬼術で創られたと思しき、地下へと続く謎の建物。聞けば、柱を始めとする一部の隊士たちは、既にこの建物へと飛び込み、鬼たちと交戦を始めているという。

お館様は我が身を犠牲に無惨をこの建物へと追いつめ、今は幼き跡継ぎ殿が、お館様に代わって指揮を執っているとも。

俺は他の平隊士たちと共に、先に突入した第一陣に続く、第二陣としての参戦となつた。

招集を受けた他の隊士たちが集まり、陣としての数が揃うまでの間にも、鴉の口から立て続けに最前線の模様が伝わってくる。蟲柱／胡蝶しのぶ死亡。上弦の参与式を擊破。霞柱／時透無一郎、並びに階級・丁／不死川玄弥、死亡。上弦の壱を擊破——

柱と月が互いに欠けていく。絶望が殴りつけてきたかと思えば希望の光が差し込んでくる、その繰り返し。それでも確かに、鬼殺隊の方が前に進んでいると思った。

そして、俺たち第二陣も建物の中へと突入し、奥へ奥へと進んでいく最中——ついにその一報が舞い込んできたのだ。

「カアアアアア——ツ!!
ニ包マレテ動ケズ!!」

発見！ 第一陣、鬼舞辻無惨ヲ発見！ 無惨ハ繭ノヨウナ物

見つけた。無惨を見つけた。身動きの取れない無惨を。鬼殺隊が！

共に道往く隊士たちが、一齊に歓喜の声を上げる。当然、俺だつて叫んだ。

届いた。鬼を滅ぼさんとする我らの刃が、ついに無惨の喉元へと届いたのだと、そう思つた。

ようやく世界の夜が明ける。宵闇に潜む悪鬼どもに怯えることなく、皆が安心して眠れる夜がやつてくる——早くも幸福な未来予想図を描き始めていた俺の視界に、ひらひらと舞い落ちる何かが映つた。

「……紙？」

伝令の鴉が身に付けていたものだろうか？ 飛び回つている最中に落としていつたらしい。目のような模様が刻まれていて、何らかの呪いまじなが籠められているようにも感じられる。

他の隊士たちが脇目も振らずに駆けていく中、俺は反射的に立ち止まり、その紙を拾い上げてしまつた。特に深い理由はない。強いて言えば、俺は昔から立ち止まりがちな人間だつた。『育手』の男にもよく叱られたものだ。判断が遅い、と。

やるべきことをやるべきときにやれない人間というのは、いつだつて肝心なときに乗り遅れる。今回もそうだつた。

ここで立ち止まらずに進んでいれば、何も為せざとも、鬼殺隊士の一人として死ねただろうに。

「復活ッ！ 無惨復活ッ!! 柱ノ到着ヲ待テ！ 回復ノ為ノ食料ニサレル！ 聞コエテ
イル者！ 皆一旦退キナサイ!!」

「え……」

復活——繭から出てきたというのか？ 無惨が？ 第一陣はどうなつた？ いや、それよりもまずは指示のとおりに——そう考えて、踵を返しかけた瞬間。道の先から相次いで、隊士たちの悲鳴が響いてきた。

「ギャアアアアアアアアアアアア!!」

「無惨だ！ 逃げつ」

「ヒイイイイイイイイ!! ひつ——」

それは狩人の声ではなかつた。狩られる側の、食われんと藻搔く餌たちの断末魔であつた。

先に進んでいった筈の隊士たちが、這う這うの体で逃げ帰つてくる。その背後から、嵐のように腕を振り回して、屍の山を築き上げながら迫つてくる、そいつこそが――

「もういい」

――鬼舞辻、無惨。

美しい男だつた。怨敵に抱くような第一印象ではなかつたが、顔だけは紛れもなく美しかつた。引き締まつた身体に白い長髪、この世の全てを見下したように酷く醒め切つたその眼光は、王たる者に相応しい威圧感を備えていた。

「誰も彼も役には立たなかつた。鬼狩りは今夜潰す。私がこれから皆殺しにする」

両親の仇。同胞の仇。命に代えても討つべき、我ら鬼殺隊全ての仇。
それが目の前にいるというのに、俺は身動き一つ取れなかつた。息をすることすら忘

れていた。我ら鬼殺隊士にとつて、呼吸とは戦意そのものだ。それを忘れてしまつては、戦うことなど出来やしない。

この瞬間に、俺は鬼殺隊士である資格を失つてしまつたのだ。
無惨は俺の脇をすり抜けて、その場を歩き去つていく。俺に興味がない——違う。存在自体が、認識されていないらしい。理由はまったく理解らないが、俺はひたすらに、鴉の落とした紙を握り締めながら祈つていた。どうかこのまま立ち去つてくれ。最後まで俺に気付かないでくれ——

祈りは届いた。届いてしまつた。無惨の気配が消え去つたのを感じた瞬間に、止めていた息をどつと吐き出し、尻餅をついた。その呼吸は乱れに乱れ、全集中のそれとはあまりにもかけ離れていた。鬼殺隊士の呼吸ではなかつた。

どうする。これからどうするんだ。第一陣はおそらく全滅、そして第二陣も。俺一人だけが生き残つて、これから一体何を為せるというんだ。

いや——そもそも俺は、再び無惨と対峙したとき、奴に刃を向けることが出来るのだろうか？

塵^{ごみ}のように食い散らかされた、同胞たちの亡骸が目に入る。
憤らなければならなかつた。仲間の仇を討つんだけど、奮い立たなければならなかつ

た。

にも拘らず、立ち上がれない。それどころか、俺は――

安堵していた。

こうならなくて良かったと、心の底から、ほつとしていたのだ。

死ぬのが怖いというのは、人として当然の感覚だと思つてゐる。

けれど、その死に怯える人々を守り抜くために、命を賭して戦う者こそが鬼殺隊士の
筈だつた。

我らに怯え、立ち止まることは許されない。お館様も、戦いの中で散つていった数多
の隊士たちも、誰もが我が身を投げ打つてきた。全ては鬼を、鬼舞辻無惨を討ち果たす
ために。なればこそ、俺も彼らに続かなければならなかつたというのに――

生き延びた。

ただただ、生き延びて、しまつた。

これを生き恥と呼ばずして、果たして何と呼べばいいのか――

8 無惨との最終決戦にうっかり紛れ込んでしまったヘタレモブ隊士の話

べん。

べん。

『left』べん 『left』

『left』べん 『left』

べん

べん。

琵琶の音が鳴り響き、瞬く間に景色が入れ替わる。何が起きているのか、まるで理解できない。

ただ、気付いたときには広間の一角にいた。狭い通路のど真ん中でへたり込んでいた筈なのに。

「炭治郎。落ち着け。——落ち着け」

広間の中央から、男の声がする。富岡義勇——水柱だ。隣にいるのは確か、竈門炭治郎。隊士になつたのは俺よりも後の筈だが、既に俺よりも階級は高く、そして強い。今も殺意に満ちた目つきで、相対する鬼舞辻無惨を睨み付けている。

信じられない。そう思つた。あの化け物を前にして、何故そのような目が出来るのか。

恐ろしくないのか？ 奴の前に敵として立つことが、どういう意味だか理解つていてるのか？

お前のその意志の強さは、一体どこから生み出されているものなんだ？

「しつこい」

鬼舞辻無惨は吐き捨てる。己を見据える竈門炭治郎の殺意を、何の価値もないと言わんばかりに切つて捨てる。

「お前たちは本当にしつこい、飽き飽きする。心底うんざりした。口を開けば親の仇、子

の仇、兄弟の仇と馬鹿の一つ覚え——

——そこから先の無惨と炭治郎のやり取りを、俺は決して聞くべきではなかつた。俺が決定的に鬼殺隊士でいられなくなつてしまつたのは、きっとこの時に違ひなかつたからだ。

「——お前たちは生き残つたのだから、それで充分だらう」

そうだ。

その通りだ。

心の底から同調して、その後すぐに、吐き気がした。

?
……今、俺は、何を思つた？ 無惨の主張に賛同したのか？ 鬼殺隊士の、この俺が

あり得ない。そんなことは、あつてはならない。

せ。
父を殺された恨みを思い出せ。母の亡骸に寄り繋り、泣き叫んだ日のことを思い出

俺の全ては、あの日から始まつたのだ。あの時確かに、俺の腹の底には途方もない悲しみと怒りがあつた筈なのだ。その感情を息吹に乗せて、心を燃やしてこそこの鬼殺隊士だ。その原点に、立ち返らなければならぬ。

だと、いうのに。

「身内が殺されたから何だと言うのか。自分は幸運だつたと思い、元の生活を続ければ済むこと」

その言葉に。

救われようとしている自分がいた。

惨めに生き残つてしまつた自分を赦してくれるような、そんな錯覚に、囚われてしまつたのだ。

「お前何を言つてるんだ？」

そのせいだろうか。

目を見開き、信じ難い者を見るように、冷たい声で言い放つ竈門炭治郎が。

そのときの俺には、酷く恐ろしいものに見えてしまった。

本当なら俺も、彼と同じ目で、彼と同じ側に立たなければいけない身の筈だつたのに。彼の言葉が刃となつて、そのまま俺の胸にも突き刺さつてくるような——そんな感じがした。

「私に殺されることは、大災に遭つたのと同じだと思え。何も難しく考える必要はない」

——ああ。

それに比べて、この男の語る言葉の、なんと心地が良いことか。

「雨が風が、山の噴火が、大地の揺れがどれだけ人を殺そうとも、天変地異に復讐しようという者はいない。死んだ人間が生き返ることはないのだ。いつまでもそんなことに拘つていなくて、日銭を稼いで静かに暮らせば良いだろう。殆どの人間がそうしていれる。何故お前たちはそうしない?」

その言葉は紛れもなく、俺の原点を否定するもの。

この言葉を受け入れてしまつたとき、俺という存在は終わつてしまう。

無惨の言葉はただの詭弁だ。たとえお前が災害に等しき力を持つていようとも、その力を持つて悪事を為すのは、お前自身の意志によるものだろう。俺たちが赦せないのは、滅ぼさんとしているものの正体はそれなのだ。そいつをこの世から消し去らない限り、いつまで経っても悲しみの連鎖は終わらない。

他者の尊厳を踏み躡り、悪びれず、意に介さない者。

それこそが鬼だ。我らが刃を以て、滅ぼさなければならぬ者たちの名だ。力の有る無しは関係ないのだ。そのどす黒い邪悪こそを、俺たちは斬らなければならぬのだ。

「理由はひとつ」

わかっている。

わかっていると、いうのに。

「鬼狩りは異常者の集まりだからだ」

その言葉に。

否定を返せない、自分がいた。

無慘の主張に、一から十まで同調するわけではない。

この男を赦せないとと思う。この男は死んで然るべきだと、心の底から思つてゐる。

ただ、その意志を刃に変えて、立ち向かおうとする闘志だけが、どうしても湧いてこないのだ。

無慘の言つている異常とは、そういうことだ。鬼殺隊の教義が異常だと言つてゐるのではない。その教義に殉じて、刀を振るい続けられる者たちのことこそを異常だと言つてゐるのだ。

両親の命を奪つた鬼は、その元凶となつた無慘は、確かに赦せない。

赦せないが——それ以上に、自分自身の命が惜しい。

正常な反応の筈だ。人間として、当然の考え方の筈だ。誰だつて自分自身が最も大切ななのだ。

だが、鬼殺隊士というものは、^{正 常}そうではない。

そういう意味では、間違いなく、鬼殺隊とは異常者の集団に他ならなかつた。

「異常者の相手は疲れた。いい加減終わりにしたいのは私の方だ」

「……無慘。お前は」

心の芯が傾いていく。鬼舞辻無惨に、自分自身を重ねてしまう。

竈門炭治郎がその言葉を放つたのは、計らずも、その最中のことであつた。

「存在してはいけない生き物だ」

その瞬間に。

俺の中で、何かが折れる音がした。

気が付いた時には、三日月の下にいた。

夜空——月が見える。地上だ。地上に出たのだ。いつの間に？　何があつた？　一
体俺はどれだけの間、呆然としていたのか――

酷い吐き気がする。体内のあらゆる器官が揺さぶられて、平衡感覚を保てない。仰向
けに倒れたまま月を眺めていたところに、今日一日ですっかり聞き慣れてしまつた、鴉
の声が響き渡る。

「カアアアツ！一時間半！夜明ケマデ一時間半！」

朝になつていなことを伝える——即ち、朝を待たなければならない理由があるとうことだ。

まだ何も終わつていな。無惨は生きている。戦いは続いている。ならば、往かなくては。

往つて——無惨の下へと赴いて、何を為せるというのだろう？ 戰う意志を無くしたこの俺が、死ぬべき時に死ねなかつた俺が、今更。

「——やれるものなら、やつてみろ!!」

答えを出せぬまま、ふらふらと声のする方へと歩いていく。

空気が震え、地が揺れている。遠くに見える十字路のど真ん中で、無惨と柱たちが戦つている。荒れ狂う無惨の無数の腕を掻い潜り、柱の技が無惨の身体を斬りつけていく。

にも、拘らず。

「えつ!? エツ!? あれつ? 斬つたのに斬れてない!?

通じない。意味を成さない。柱でさえも、まるで無力。

終わりだ。技を出し切ったことによる硬直と、手傷を与えられなかつたことへの動搖。無惨を前にして、それは余りにも致命的な隙だつた。水柱、蛇柱、恋柱。次の瞬間に、三つの柱が纏めて折れる。無惨が軽く腕を振るうだけで、彼らの胴はいとも容易く千切れ飛ぶのだ。

俺はそのときを、ただただ遠巻きに眺めていた。阿呆のように。白痴のように。
そう。

俺はまたしても、為すべきことを為せなかつたのだ。

「行け——!! 進め——!! 前に出ろ!!」

結論から言うと、柱は折れなかつた。

彼らの前に飛び出した、無数の平隊士たちが盾となり、無惨の攻撃を防いだのだ。

18 無惨との最終決戦にうっかり紛れ込んでしまったヘタレモブ隊士の話

俺と同じ、柱に比べればその他大勢に過ぎない者たちが、己が命を微塵も顧みることなく。

「柱を守る肉の壁になれ！ 少しでも無惨と渡り合える剣士を守れ!!」

「——ひつ」

戦う者の喉からは決して出る筈のない、か細い呻き声だった。
俺の声だった。

「今までどれだけ柱に救われた！ 柱がいなけりやとつくの昔に死んでたんだ！！ 聴するな戦え——つ！！」

やめろ。
やめろ。
やめてくれ。

誰も彼もが死んでいく。我が身を投げ打ち、無惨という絶対的暴威に立ち向かって散っていく。

それがお前のやるべきことだと、この光景が、隊士たちの絶叫が、突きつけてくる。わかっている。

わかっているんだ。

声を上げた隊士は、俺たちに死ねと言っていたわけじゃない。最善を尽くせと、そう訴えただけなのだ。その声に追いつめられているのは、俺に覚悟がないからだ。折れてしまっているからだ。

隊士の主張は正しい。どこでも、正しい。俺が命を惜しんだばかりに、柱たちの命が失われることなど、あつてはならない。断じてあつてはならない。

その正しさに今、俺の心が、圧し潰されそうになつている。

『存在してはいけない生き物だ』

「あ……ああ、あああああ……」

そうだ。

俺のような者が、鬼殺隊に属していてはいけない。

鬼を滅ぼす刃だなどと、謳つては、いけない。

俺という存在のせいで、俺がここにいるだけで、彼らの戦いが、彼らの物語が、汚れてしまう。

心を燃やせぬ者に、鬼殺隊士を名乗る資格はない。

『滅』と刻まれた隊服を脱ぎ捨て、半裸になつた格好のまま、ふらふらとその場を歩き去る。

獣のように。鬼のように。人ならざる、者のように。

或いは、鬼殺隊の刃は、無惨の命をも断ち切るのかも知れない。彼らの心の炎は、邪悪をも焼き尽くしてしまえるのかも、しれない。

それでも——嗚呼、それでも。

鬼舞辻無惨が滅びても尚、至るところに鬼は潜んでいる。

——ほら、今まさに一匹、野に放たれようとしているだろう？
生き汚く、見るに堪えない、惨めな小鬼が、ふらふらと。

或いは蛇足、或いは救済、或いは尚も終わらない心折

俺は。

俺が一番、自分のこと好きじゃない。

ちゃんとやらなきやつていつも思うのに、怯えるし、逃げるし、泣きますし。

変わりたい。

ちゃんとした、人間になりたい。

——我妻善逸

——周囲に満ちた暗闇が、建物の中ではないことを伝えていた。城を地上へと引き上

げることに成功したのだ。

愈史郎は地に伏せた身体を起こそうとして、それからすぐに、立ち上がるれないことを悟つた。腰から下が瓦礫に埋もれてしまつていて、いつそのこと潰れていてくれれば上半身だけで這い出せたものを——などと思いつつ、周囲を見渡す。

自分が操っていた、琵琶を弾く鬼の姿はない。無惨に細胞を完全に破壊されたようだ。

2丈（約6m）ほど先に、一人の男が倒れている。無惨と綱引きをしている最中に声を掛けってきた鬼殺隊士だ。

「……おい、起きろ。『俺を食え！』などと威勢の良いことを言つておいて寝るんじやない」

返事はない。地上に出た時の衝撃で気を失ったのか、或いは最悪、死んでいるのか。顔が向こうに向いているので判別が付かない。軽く舌打ちをして、城のあちこちにバラ撒いた『眼』へと意識を向ける。

愈史郎の血鬼術によつて生み出された『眼』と呼ばれる紙には、身に付けていると他の視界に映らなくなるという効果の他、他の『眼』と視界を共有できる効果も備わつ

ている。城のあちこちにバラ撒いた『眼』の保有者を見つけ出し、そいつに瓦礫から身体を引き摺り出させるのだ。

高速で上空を素早く飛び回っている視界——駄目だ。こいつは鴉だ。役に立たない。暗転したまま動かない視界——持ち主不在で裏返しになつてどこかに落ちている。次。

傷だらけの女と金髪の男が映つてゐる視界——我妻だ。ということは持ち主は村田か？ それにしては随分と視界の動き方が忙しない——とにかく、どうもこの三人は市街地からやや離れた場所に出てきてしまつたらしい。こちらへと辿り着くには時間が掛かりそうだ。

ならばこいつはどうだ。やけにゆつたりとした歩みだが、周囲に映る建物が愈史郎の視界に映るそれと殆ど変わりない。今通り過ぎようとしている建物など、そこの角に建つてゐると全く同じでは——愈史郎がそのことに気付いた直後、角から『眼』の持ち主がふらりと姿を現した。

半裸の男であった。刀を下げてゐるので鬼殺隊士の一人であることは間違いないのだが、何故か隊服を着ていなかつた。それに眼差しもどこか虚ろで、生氣をまるで感じられない。そんな顔つきでゆらゆらと千鳥足になつてうろつく様は、さながら幽鬼の如し。顔立ちも特筆すべき点はなく、愈史郎の美的感覚に照らし合わせてみれば、醜男モブで

あつた。だがそんなことは関係がない。

たとえこいつが醜男モブだろうと、鬼殺隊士であるのなら、果たすべき責務というものが
ある筈だ。

「おい！ そこのお前！ 僕をここから引っ張り出せ！」

声を掛けると、醜男は緩慢に視線をこちらへと向けた。その遅々とした動作に苛立ち
を覚える。

こいつは一体、戦いもせずに何をやつているんだ。既に無惨と隊士たちの戦いは始
まっている。一刻も早く自分もそこへと駆けつけて、隊士たちの助けにならなければな
らないというのに。

そう——珠世様の命を奪つた、鬼舞辻無惨を何としてでも滅ぼすために。

視界が滲みそうになる。食い縛つた歯がぎりりと音を立ててゐる。ありつたけの悲
しみと怒りが絹交ぜになつて、頭がどうにかなりそうだつた。

珠世様が死んだ。珠世様が死んだ。奴が殺した。鬼舞辻無惨。奴が。奴が!!
赦せない。赦せるわけがない。珠世様の存在しない世界で、奴がのうのうと生き続け

ることなどあつてはならない。殺してやる。絶対に、殺してやる。

借り物の隊服が今になつて、初めて自身のものになつたような気がした。俺は鬼だが、だつたら何だ。今の俺は間違いなく、この隊服を着ている誰よりも、鬼舞辻無惨を殺したいと思っている。ならば俺は鬼殺隊士だ。そんな肩書きに価値があるとも思わないが、奴を殺すために死力を尽くす者の一人だ。

お前はどうなんだ、醜男。何故未だにぼうつと突つ立つてゐるんだ醜男。お前の顔は何故そんなにも醜いんだ醜男。ああクソ、眺めれば眺めるほどに醜く見えてくる。醜い上に愚図で鈍闇とは、救いようのない生き物だ。こんな奴が未だに生き永らえているというのに、珠世様が既にこの世のものではないという事実が信じられない。腸が煮えくり返るような思いがする。

「……駄目だ」

「何が駄目だ。試しもしないうちから諦めるな馬鹿が。何ならそこに寝てゐる奴を叩き起こしてもいいんだぞ」

「そうじやない……俺はもう……駄目なんだよ」

ただでさえ形の悪い醜男の顔が、更にくしやりと歪む。もはや正視に堪えない。更に

言うなら、口にしている言葉の意味も理解できない。鬼との戦いで深手を負っているのならまだしも、こいつの身体に傷らしい傷など欠片も付いていないというのに、一体何が駄目だと言うのか。

「鬼殺隊士になんて、なるべきじやなかつた。俺には資格がなかつたんだ。無惨に対する恨みも、命を投げ出す覚悟も、まるで足りなかつた……仮に無惨を滅ぼすことが出来たとしても、その時に皆と喜びを分かち合う資格が、俺にはもうないんだ……」

そう言つて愈史郎から視線を切り、ふらふらと歩き去ろうとする醜男。

待て。

まさか、こいつは。

——逃げ出そうとしているのか？ 誰もが命を懸けているこの戦場から、たつた一人で？

馬鹿な。あり得ない。信じられない。無惨がすぐそこにいるんだぞ。珠世様を殺したあの男を、この世から葬り去れるかどうかの瀬戸際なんだぞ。赦せないとは思わないのか、鬼舞辻無惨を。そして何より――

大切な人の仇から逃げ出す自分自身を、赦せないとは思わないのか。

「ふざけるな!!」

怒鳴り付けられた醜男がびくりと身体を震わせ、怯えたような視線をこちらに向けてくる。その弱者を気取った態度にもまた腹が立つてくる。こういう態度を取つていれば、叱りつけている相手を悪者に出来るでしも思つてはいるのだろうか？ お前を憐れんでやるとでも思うのか？ そんな筈がないだろう。甘つたれるのも大概にしろ。

「逃げるな！ 務めを果たせ！」 それでも鬼殺隊士かお前は!!

「……だから言つたじやないか、資格がないって。俺はもう、鬼殺隊士じやない。俺は、お前たちには、なれない。自分を捨てて戦える者になんて、なれないんだ……」

鬼だ。

こいつは鬼だ。

こいつの吐き出す言葉の全てに殺意が湧く。こんな感覚を味わうのは、生まれて初めてだ。自己弁護と言い訳の塊が肉を纏つて蠢いている。何故こいつの顔がこうも醜く見えるのか、その理由がよく理解^{わか}った。魂が歪んでいるからだ。心の歪みが外見にも表れているから、こいつはこんなにも醜いのだ。この世で最も高潔な心の持ち主だった珠世様が、この世の誰よりも美しい存在であつたように。

赦せない。無惨以上にとは言わないが、この男もまた赦せない。地に手を突いて、腕の力だけでどうにか這い出そうとしながら、愈史郎は去り行く醜男の背中に呪詛の言葉を投げかけた。

「お前——このまま逃げ出して、幸福な生涯を歩めるとでも思つてているのか」

口にしながら、愈史郎の中に思い浮かぶ、二人の男の顔があつた。

金と黒。雷の刃。同じ呼吸の技を身に着けながら、袂を分かつことになつた剣士たちの顔だ。

「城の中で俺は、元鬼殺隊の男が鬼になつてゐるのを見た。そいつは上弦の座を与えられ、力に酔いしれて奢つっていた。だが結局は首を斬られて呆氣なく死んだ。平時であれ

ばお前よりも臆病者にしか見えない、弱音と泣き言だらけの隊士がそいつを討つんだ」

「……お前、一体何の話を……」

「わからないか？　お前はその上弦の鬼と同類だと言っているんだ。恥知らずで生き汚く、保身のためならいくらでも誤った道へと進んでいける人間、それがお前だ。その先に待つのは地獄だぞ。仲間を見捨てて逃げ出すようなお前を愛してくれるような者なんて、この先一生現れる筈がない。そうしてお前も、独りで惨めに死んでいくんだ。あの時何故逃げ出してしまったのか、何のために生き永らえたのかと後悔しながら、惨めにな」

醜男が足を止めて、ゆっくりと振り返る。そして、あろうことか——こちらを睨み付けてきた。

おぞましい。仲間の命を奪われても憤ることすら出来なかつた癖に、自分のこととなると一丁前に怒りを露にするだなんて、恥知らずにも程がある。いよいよもつて見るに堪えなくなってきた。

「……そんなことはない。生きてさえいれば、幸せになれる機会は必ず訪れる筈だ。そ

う、生きてさえいれば——」

「本当にそう思うか？ 仮にお前がささやかな幸福を手にすることが出来たとしても、絶対に頭を過る筈だ。何故お前だけが生き残るんだ、何故自分たちは失ったのにお前だけが——という、命を落とした者たちの憎しみの声がな」

「そんな奴はいない！ 鬼殺隊にそんな奴は一人もいないんだ、仮にいるとしたら——」「そうだ。お前だけだ」

真正面から見据えてそう言うと、たちまち醜男の目から霸気が失われて、怯える者のそれへと早変わりする。

一度折れた意志というのは、容易く元には戻らないものだ。

「お前自身の弱い心が、有りもしない恨みの声を生み出し、お前を責め立て続けるんだ。為すべきことを為さない限り、その声からはいつまで経つても逃れられないぞ。聞こえない振りを続けるのはお前の勝手だが、そうすればいいよ、お前の歩む道は畜生道だ。人間らしい末路を迎えるとは思うなよ」

「う…………うう……」

醜男が呻き声を上げる。人に留まるか、鬼に墮ちるかの瀬戸際でもがき苦しんでいる。

醜男の懊惱を愈史郎は理解できない。愛する者を失つた世界で生き永らえることに、何の意味があるのかと愈史郎は思つてゐる。己の命と引き換えに無惨を討ち果たすことが叶うのなら、喜んでそうする。鬼殺隊士というものも、そういう連中の集まりだと思つていた。

だがこの醜男は違うのだといふ。自分自身の命が何よりも大事なのだといふ。そんな輝きのない眼で、活力も何もかもを失つたような風体で、ただ生き続けることに何の意味があるのかと思いかけたところで――

『――生きたいと思いますか？　本当に、人でなくなつても生きたいと――』

不意に。

そんな言葉を、思い出した。

何も最初から、あの方に生涯を捧げるつもりで鬼になつた訳ではなかつた。珠世様への愛に目覚めたのは、あの方のためなら死んでもいいと思うようになつたのは、共に生き、あの方の優しさに触れ続けてからのことだ。

初めはただ、ひたすらに、願望だけがあつた。

死にたくない。

その一心に縋り付いて、愈史郎は人であることをやめた。

誰もが最初から、信念を——折れない心を持つてゐるという訳ではない。

そもそも、人間なんて初めは誰もが鬼だ。『餓鬼』という名の甘つたれた生き物だ。それが誰かに育てられ、愛されて、初めて餓鬼は人間になれる。逆に言えば、その餓えが満たされない限り、いつまで経つても餓鬼は餓鬼のままでいることしか出来ないので。

こいつもきっと、未だに餓えているのだろう。だから生へと縋り付くのだ。仮にも鬼殺隊士になつた以上、鬼に恨みを抱ける程度の愛は授かつてはいたはずだが——それだけでは足りなかつた、ということなんだろう。心の中の幸せを入れる箱に穴が空いていり、とても言えればいいのか——

「——さつきの話の続きをしてやる」

再び脳裏に、二人の剣士の顔が過る。

我妻善逸と上弦の陸。臆病ながらも人のままで在り続けた者と、他者を顧みず鬼へと墮ちた者。

「上弦の陸の首を落とした奴の話だ。奴は戦っているときこそ勇ましかつたが、治療を終えてからはそれはもう見苦しかつた。口を開けば痛い辛い死ぬもう駄目無理の繰り返しで、とても上弦の首を斬つた剣士とは思えない無様さだつた。鼻水と涙を撒き散らし、みつともなく、見るに堪えない——まるでお前の顔のようだつた」

「——な」

「だが、俺は奴を醜男だとは思わない」

——そう、珠世様を人間として扱つてくれた、竈門禰豆子を醜女だと思えなくなつたように。

愈史郎の目は、自身が鬼だと感じた者を醜く映すように出来ている。血鬼術の性質に

よるものなのか、或いはこの眼が血鬼術を生み出したのかまでは理解らない。だが、とにかく。

竈門禰豆子の肉体は鬼だ。だが心は、魂までは、そうではなかつた。
我妻善逸も、ひたすらに、人間だつた。亡き師のために刀を振るう、自分ではない誰かのために命を懸けられる者だつた。

人間らしくあろうとする者を、愈史郎の目は醜く映さない。

「散々喚き散らしながらも、奴は今尚この地に留まつて戦つている。他の隊士たちもそうだ。奴を——鬼舞辻無惨を赦せないという一心で、怯える心に喝を入れながら踏み止まつてゐる。——お前はどうちだ、醜男。踏み止まるのか、それとも転げ落ちるのか」

我妻善逸と、猶岳。

お前が本当になりたいものは、どうなんだ。

醜男。

畜生。

畜生。畜生。畜生。

この無駄に顔の良い隊士は一体何なんだ。どうして俺の姿が見えるんだ。無惨にさえも気付かれなかつたというのに。どうして俺はこんなところで、こんな男に捕まつて、説教染みたことを聞かされる羽目になつていいのか――

「……転げ落ちたく、なんかない」

わかつてゐる。

理由なんて、わかりきつてゐるんだ。

「それでも、俺は、死にたくない……死にたくないんだよ……」

俺が、鬼だからだ。

どうしようもなく、甘つたれた、餓鬼だからだ。

わかつてゐるんだ。一度逃げ出すことを覚えたたら、きっと俺はこの先も、弱い方へ、弱

い方へと流れしていく人間になつてしまふんだつて。そうしてやがては、眞の意味での鬼に成り果ててしまうんだろう。この隊士の話に出てきた、上弦の陸の男のように。

どうして俺はこうなんだ。そうするべきだと思つたことから、平氣で逃げ出してしまえるような弱い人間になつてしまつたんだ。身寄りを無くして他に選択肢がなかつたからとはいへ、己の意思で鬼殺隊士になることを選んだんじやないか。だつたら務めを全うしろよ。他の誰もが出来てゐることを、どうしてお前は満足にこなせないんだ。

両親の——育ての恩に報いるべく、我が身に代えても鬼舞辻無惨を討ち果たす。たつたそれだけの覚悟を、どうして俺は持つことが出来ないんだ。

両親に愛されていなかつた訳じやない。ただ、何かが足りなかつたのだと思う。言葉か時間か、或いはその両方か。とにかく、俺はまだまだ、欲しかつたのだ。

齡九にして両親を失い、育手に三年修行を付けられ、隊士になつたのが十二の時。才覚は無く、階級も碌に上がらないまま、気付けば四年もの月日が過ぎていた。特別仲の良い隊士がいる訳でもないし、女も知らない。ただ我武者羅モロに、刀を振るうだけの毎日。その果てに待つてゐるのが、無惨に薙ぎ払われるだけのその他大勢に成り果てるくだなんて、俺には耐えられない。

俺の命を糧にして、柱が無惨を滅ぼしてくれるのならそれで満足だ——なんて気持ち

には、到底なれない。

屑だ。

屑以外の何物でもない、俺の本心だ。

『存在してはいけない生き物だ』

畜生。

だから俺は、鬼殺隊士なんかになるべきじやなかつたんだ。

鬼を滅ぼす刃たちの住む世界になんて、足を踏み入れるべきではなかつたんだ。

彼らの傍にいると、俺みたいな人間は、存在していること自体が罪のように思えてくる。彼らが鬼へと向ける言葉が、そのまま自分自身へと突き刺さつてくるような錯覚に囚われてしまう。

ともすれば、俺の本来いるべき場所は、鬼殺隊ではなかつたのかもしれない。それこそ上弦の陸のように、身も心も鬼へと成り果ててしまえば、こんな苦しみを味わうこともなかつたのかもしれない。けれど。

ああ、けれど。

それでも俺は、人間の今まで在りたいんだ。
鬼なんか、外道なんか、墮ちたくはないんだ。

「死にたくない……だからって、人であることも止めたくない……畜生、俺はどうすればいいんだ、なあ、どうすればいいんだよ……？」
「……とりあえず、今のお前が何よりも先にやるべきことを言つてやろうか」

そう言つて、顔の良い隊士は塵ゴミを見るような目で俺を見上げながら。

「俺を、ここから、引っ張り出せ」

瓦礫に半身埋まつたままの格好で、ふてぶてしく、命じてくるのだった。

蟬人間しがみつく者たち

結局、俺一人では隊士——愈史郎を瓦礫から引つ張り出せなかつたので、近くで氣を失つていたもう一人の隊士を起こして、手伝つてもらつて。

無惨との戦いで重傷を負つた（正直見つけた時には手遅れだとしか思えなかつたが）竈門炭治郎を、新たに合流した隊士——村田と共に救助して。

その後、何やかんやあつて——本当に何やかんやあつた末に、無惨は滅び、戦いは終わつた。

俺はただ、金魚の糞のように愈史郎の後ろをついて回るばかりで、殆ど何も出来なかつた。

愈史郎の指示に従つて、怪我を負つた隊員の手當てに走り回つたりはしたけれど、最後まで刀を振るうことはなくて。

誰もが傷付いた戦場の中、隠を除けば、俺一人だけが血を流していなかつた。

竈門炭治郎が鬼へと変えられ、隊士たちに牙を剥いたときも、俺は身動き一つ取れなかつた。

とうとう最後の最後まで、俺は『戦う者』には、戻れなかつたのだ。

で、そんな俺が今いつたい何をやつてているのかというと。

蝶屋敷。今は亡き蟲柱・胡蝶しのぶの持ち家にて、ぎやあぎやあ喚き散らすズタボロの金髪隊士こと我妻善逸を相手に、四苦八苦しながら包帯の巻き直しを行つてゐる最中

で——ああもう暴れんなよ！ 暴れんな！ 手元が狂うだろうが！

「嫌だあああ何が悲しくて野郎に包帯巻き巻きされなきやなんないの!? アオイちゃんどこ!? なほちやんきよちゃんすみちゃんは!? 俺の可愛い蝶屋敷の女の子たちはどこ行つたのよ!」

「他の部屋にも重傷の隊士たちがわんさか詰めてんだよこの屋敷には！ あの子たちは今そつちの相手で手一杯なん——うわ、急に起き上がるんじゃない！」

「うおおお離せえええ!! 僕もそつちで女の子たちに優しく看病してもらうんだあああああ!! ていうかね!? さつきから思つてたんだけどアンタ一体誰なのよ!? 蝶屋敷に蝶以外の生き物が住んでたらそれもう蝶屋敷じやないでしようが！ 蝶屋敷は————」

と、そこまで捲し立てておきながら急に萎んで大人しくなる我妻。何だこいつ……まあいい、今のうちにさつさと済ませてしまおう。

「……死んじやつたんだよな、しのぶさん」

——済ませてしまおうと、思つたのだけれど。
その呴きに釣られて、動かす手が止まつてしまつた。

「甘露寺さん……岩のオツサン……柱稽古が滅茶苦茶しんどかつた蛇のヤツ……風の
オツサンから助けてやつたのに俺のこと殴りやがつた同期のアイツ……甘露寺さん
……霞柱の子まで……みんな俺より強かつたのに、なんで俺なんかが生き残つて柱の皆
が死んじやつたんだろ……いや俺のこと殴つたやつは強かつたのかわかんないけど」

どさくさに紛れて恋柱だけ二回呼んでやがるこいつ。しかも名前で。

胸の包帯を取り換える。白が剥がれて、ぐちやぐぢやの赤が露になる。痛い痛いと泣
き喚くのも無理はない。こいつもまた、鬼と戦い傷付いた者の一人なのだ。鬼殺隊士の
務めを果たし、決して逃げ出すことのなかつた者。

「……俺なんかとか、言うなよ」

「へ」

だから。

頼むから、そんなことは、言わないでほしい。

「愈史郎から聞いたよ。おまえ、上弦の鬼を斬ったんだろ。しかもそのまま、無惨とも戦つて——立派で勇敢な鬼殺隊士だ。だから、俺なんかなんて言わないでくれ。おまえみたいなすごい奴に、そんなことを言われると——」

——自分が惨めで、堪らなくなる。

そうだ。

どうして自分が生き残ったのかだなんて、それこそ俺が口にするべき言葉なんだ。為すべきことを為さず、命を懸けるべきときに懸けられなかつた者、それが俺だ。

そんな俺がのうのうと生き残つて、死力を尽くした柱の面々がこの世の者ではない。そのことについて考える度、吐き気と自己嫌悪で死にたくなる。

死にたくなるだけ、だけれども。

「……なんか知らないけど、じめつとしてるね。アンタの音」

無言で包帯を巻き直していると、不意に我妻がそんなことを言つた。傷口から視線を上げ、正面から向き合う。訳の分からぬ台詞に反して、こいつの表情は笑つていなかつた。

「……音？」

「そう。生き物の中からはさ、それはもう色んな音がするわけよ。それを注意深く聞いてみると、目の前の奴が何考へてるのかとかなんとなくわかるの。……今のアンタからは、どんよりとした音がする。何かを引き摺つてて、吹つ切れてない——そんな感じ。鬼は皆いなくなつたつてのにさ、なんだつてそんなに暗いわけ？　いや、野郎の悩みとか正直どうだつていいんだけど」

だつたら聞くなよ、と言い返すことは出来なかつた。

あまりにもみつともない打算だが——こいつであれば、俺の抱えている後悔に、多少なりとも理解を示してくれるような気がしたからだ。

我妻善逸。向こうは俺のことを知らなかつたようだが、俺はこいつのことを見つけていた。というより、こいつは鬼殺隊の中ではそれなりに有名人だつた。何と言つても金髪だ。隊服も黒、髪の色も黒が殆どの鬼殺隊にあつて、こいつの外見は集団の中になつて

も一際目立つ色合いをしていた。髪色の話をするなら、最も人目を惹いていたのは恋柱の桃色の髪であつたが——それももう過去の話だ。

柱のところで一緒になつたのだが、宇隨天元の竹刀で背中をはたかれる度に悲鳴を上げては彼の妻たちに泣きついていたのを覚えている。……まあ、何やかんや言いながらも、次の稽古に移る許可を得たのは俺よりも遙かに早かつたのだけれど。

そう——駄目だ無理だと口にしながら、こいつは決して立ち止まらない。根性^{ヘタレ}無しのようで芯がある。折れそうで、折れない男。俺と似ているようで、その部分が決定的に異なるつている。

その違いは、何処から生まれたのか。俺はそれを知りたいと思つた。今更の話かもしれないが、その正体を掴まない限り、俺はこのまま何者にもなれないような気がした。人間にも鬼にもなれない、中途半端な何かのままでは、いたくなかったのだ。

「……俺、逃げようとしたんだ。無惨との決戦の最中に」

故に俺は、口を開いた。

話した。全てを話した。敵の本拠地で無惨に仲間たちが殺される中、ただ一人生き

残つてしまつたこと。その後、とある隊士と無惨の会話を盗み聞きしたこと。地上にて、柱たちを庇うために飛び出すべき場面で飛び出せなかつたこと。戦場を離れようとしたところで愈史郎に見つかって、なし崩し的に踏み止まる結果になつたこと――

「――それで今は、愈史郎^{アサイツ}の助手みたいな立ち位置に納まつたつてわけ?」

「助手なんて聞こえの良いもんじやない。小間使いみたいなもんだよ。あいつの指示に従つて、あつちこつちの部屋を行き来して怪我人の面倒を見てる。……あいつ、日中はあんまり自由に動けないからな。この部屋もそこの窓から日が差してるし」

「そう、それだよそれ! ユシローつてアレでしょ、猶岳とやり合つて死ぬとこだつた俺を助けてくれたあの無表情ヤローのことでしょ!? 実は鬼だつたとか初耳なんだけど!!」

「俺も聞いたときは驚いたよ。あいつとその飼い猫つて、無惨以外の奴に鬼にされたつて話でさ。無惨が死んだ今でも唯一生き残つてゐる、世界に一人と一匹だけの鬼だ」

「マジで? 滅んでないじやん鬼。鬼殺隊まだ仕事残つてんじやん」

「……おまえ、愈史郎に助けてもらつたんじやなかつたのか? 命の恩人を滅ぼそつとするなよ」

「だつてアイツめちゃくちゃ顔整つてるじやんよおおおおお!! アレでしょ!? どうせ

「アイツも嫁とか三人こさえてるような奴なんですよ!?　あの顔だつたら選びたい放題だもんがあよりどりみどりだもんなあ!?　ねえ!?　アンタもこの気持ちわかりますよねえ!?　同じ冴えない見た目に生まれた者同士さア!!」

傷口に指突っ込んで搔き回してやろうかなこいつ……。

「……俺の顔の話はともかく、愈史郎に対するおまえの妄想は的外れだと思うよ」

「いーや当たつてるね！　あんだけ顔の良いヤローが女と無縁の人生送るなんてあり得ないね！　男色家ホモセクだつていうならわかるけど、そんな感じでもなかつたし——」

「——その縁はもう、切れたんだよ。我妻」

「……は？」

「無惨を滅ぼすために、鬼殺隊に協力してくれた鬼——珠世リサって名前だつたそうだが、その女性が愈史郎の想い人だつた……らしい。だけど、その人もある戦いで命を落としてしまつた。あいつは——愈史郎はもう、独りなんだ」

戦いの後——俺が愈史郎の使いつ走りを務めることになつた過程で、ふとした流れから打ち明けられたことだ。

無惨は死に、愛する人もいなくなつた。最早この世に未練もないが、医者の真似事程度は務めてから去つてやる——というのが、愈史郎の言い分であつた。胡蝶しのぶが命を落とした今、蝶屋敷を半ば乗つ取るような形で、あいつは傷を負つた隊士たちの治療に尽力している。

あいつはこの先、どうするのだろうか。このまま役目を終えたら、黙つてふらつとこの屋敷からいなくなるつもりなんだろうか？ 独りで死ぬのは惨めなことだと、あいつは口にしたけれど——このまま放つておいたら、あいつ自身がそんな末路を迎えてしまいそうで、心配になつてしまふ。

愈史郎の手伝いを名乗り出たのは、多分、それも動機の一つだつた。鬼殺隊士として役に立てなかつたことの罪滅ぼしだとか、そんな立派な理由じやない。第一、こんなことで逃げ出そうとした罪を償えるとも思つていはない。ただ――

『逃げるな！ 務めを果たせ！』

その言葉が今も、耳にこびり付いて離れないから。

俺は未だに、一度脱いだ筈の隊服に袖を通して、鬼殺隊に身を置き続けている。利己的で弱く薄汚い、悪鬼の滅ぼし方を、知るために。

「……そつか」

我妻はぼつりと、それだけを言つた。やはりこいつも鬼殺隊士である以上、大切な人を失つたという話には共感するところがあるのだろう。

包帯の巻き替えはもう済んでいる。鍛えているだけあつて傷の治りが早い。この調子でいけば、二、三ヶ月もすれば普通に動けるようになるだろう。素人見立てだが。

「……なあ、聞いてもいいか」

「うん？ 何？」

「おまえ——無惨や上弦の鬼と戦うとき、怖くなかったのか？ 死にたくないとか、逃げ出したいとか、そういうことは思わなかつたのか？ どうして最後の最後まで、おまえは戦い続けることが出来たんだ？」

意を決してそう訊ねると、我妻はどこか遠い目をして黙り込んでしまつた。珠世さんの話をした時から、どことなくこいつの纏う雰囲気に変化が生じたような気がする。或いは、死んだ柱たちの話をしていた時の空気に戻つてしまつたというか——故人を偲ぶ

者特有の重苦しさというか、そういういつたものを感じる。

「……無惨と戦つてるとときは、怖かつたよ。悲鳴も上げたし、半べそも搔いてたような気がする。だけど——猶岳と戦うときは、平氣だつた」

「……猶岳？　上弦の陸か？」

「そうだよ。元鬼殺隊士で——俺の兄弟子だつた」

——ああ。

そういうえばこの二人は、そういう関係だつたような気がする。

猶岳。あまり絡んだことはないが、如何なる時でも不機嫌そうな雰囲気を纏つた奴だつた。睨み付ける以外の視線の向け方を知らないような眼光と、吐き捨てるようぶつきらぼうなその口調が他者を遠ざけていた。鬼殺隊士の誰にも心を開いていないような、そんな印象のある男だつた。

けれど、そうか。弟子がいたのか。いや違う、弟弟子か。どうでもいいけど、弟弟子つて弟と弟が二つくつついてて何だか変な言い回しだよな。いや、本当にどうでもいいんだけど。

「……つてことは、同門対決だつたのか。やり辛かつただろ」

「いいや——逆だつたよ。これは絶対に俺がやらなきや駄目なんだつて、ずっとそう思
いながら戦つてた。……今まで生きてきた中で、一番集中して戦えた相手だつたと思つ
てる」

「それは……なんていうか、責任感からか？ 同門の剣士が鬼になつてしまつたことに、
けじめをつけるつていうか……」

「……それも勿論あつたけど、責任感とか、その前に——許せなかつたんだ。アイツ 獐岳のこと
も、自分のことも」

許せない。その強い言葉に反して、我妻の語りに怒りの感情は乗つていなかつた。或
いは、その感情は既に燃やし尽くしてしまつたのか——今はただ、やり切れない無念だ
けを抱えているように俺の目には映つた。

そして我妻は、ぼそりとその事実を口にした。

「——獵岳が鬼になつた責任を取つて、じいちゃん——俺たちの師匠は、腹を切つて死ん
だ」

それは。

我妻もまた、大切な人を失つた者の一人なのだという、告白であつた。

「……おまえらの師匠つて、確か、元鳴柱の——」

「そう。桑島慈悟郎じいちゃん。本人も猶岳もじいちゃんなんて呼ぶな、師範とか先生つて呼べつて言つてたけど、俺にとつてはじいちゃんだつたんだ。いつも厳しくて、頭叩かれてばつかりだつたけど——俺はじいちゃんが好きだつた。でも……死んじやつたんだ。死んじやつたんだよ」

ずびり、と鼻を啜る音がする。

我妻が自分のことではなく、他人のことで泣きそうになつてゐる姿を、俺は初めて見たような気がした。

「——その、悪い。辛いことを思い出させてしまつたな」

「……いや、いいよ。アンタに聞かれなくつたつて、これから何度も、ふとした拍子に俺はきっと考えるんだ。どうやつたら、じいちゃんは死なずに済んだんだろう。どうやつたら、猶岳を鬼にしないで済んだんだろう——つてさ」

「……気持ちはわかるけど、我妻が背負う責任じやないと思うよ、それは」

猶岳のことはよく知らない。奴が鬼になつた理由もわからない。けれど、弱い人間の
考へることなら、よく知つてゐる。

苦しい希望の道と甘美な絶望の道が目の前に示された時、一も二もなく後者の道へと
進んでいくのが弱い人間だ。そんな人間に、他者の差し伸べる手は届かない。俺が愈史
郎の言葉に従つて踏み止まることが出来たのも、逃げ出したところで甘美はないと突き
つけられたからだ。そうして何処へも行けなくなつたまま、鬼殺隊士のフリをして生に
しがみ付いているのが今の俺だ。

命を賭して戦うべき相手は、もういなくなつてしまつたというのに。

「諦めるな、頑張れつてどれだけ言われてもさ、どうにもならない時つてあるんだよ。そ
んな自分を惨めに思つて、悔やんで、どうしようもない奴だつて思うんだけど——結局、
それ止まりでさ」

「……俺が……いる……？」

「いねえよ。見るな。そんなまじまじと俺を見るな。あと鼻水拭け」

「いやでもね？」わかる。アンタの言つてることメチャクチャわかるよ俺。ホントね？

頑張れって言われて頑張れるんだつたら人間苦労しないですよねえ!! とか俺もう頑張ってるよ! 頑張ってるつもりなんだけどさあ、周りはそう見てくれないっていうか、もつとやれるだろつて俺のこと絞つてきてさあ、もうカラツカラだよ何も出ないよつて思つてもまだ締め上げられるの! それがホントにしんどくつてさあ、辛い辞めたい逃げたいつて何遍も何遍も思つたよマジで!!」

「……それ、桑島さんにしておられた頃の話か?」

「そりなんだよじいちゃんつてば酷かつたんだよホントに! 俺がいつまで経つても一の型しか出来ないからつてごんごん頭ぶつ叩くし、木にしがみ付いてみんな泣いてた俺の首に繩引つ掛けて引き摺り下ろすし! 鬼なんかよりもじいちゃんの方がよっぽど鬼だつたね! 怖かつたね!」

蟬か、おまえは。

何なんだろうなコイツは。実の師のことをボロクソ言つて、鬼だ何だと言いたい放題で、そんな人のために命を懸けて、兄と戦い、討ち果たして。
頑張れたり、頑張れなかつたりで。

「……そんなおつかないお師匠様でも、好きだつたんだよな。おまえ」

そう言うと、我妻はまたも躁から鬱へと急転換するように、それまでの勢いを一気に失つて。

「……うん」

短く、されどはつきりと、頷いてみせた。

「——アンタさ、逃げようとしたつて言つてたよね」

「……ああ」

「俺もそうだったよ。じいちゃんのしごきに耐えらんなくて、キツくて、もう無理だつて思つて——その度に木の上によじ登つてぎやーぎやー言つてたんだけど、じいちゃんは絶対に、俺のことを諦めたりしなかつた。本当に折れなかつたのは、俺の方じやない。じいちゃんの方だつたんだ」

「……そりや、しごいてる方に折れるも何もないだろ」

「そうかな？ いつだつたか、俺は猶岳にこう言われたよ。先生がお前に稽古をつける時間は完全に無駄だ。なぜお前はここにいるんだ、なぜお前はここにしがみつく——

「一つてさ。……同じ気持ちを、じいちゃんが俺に抱いても不思議じやなかつたつて、そ
うは思わない？」

その罵倒は。

今の俺にも、酷く突き刺さる、言葉だつた。

無駄なのかかもしれない。今更他人に答えを求めたところで、手遅れなのかかもしれない。
一度鬼へと墮ちかけた俺が、真つ当な人間の道へと舞い戻る手段など、存在しない
のかも知れない。

自分自身を諦めてしまつたら、何もかもが終わつてしまふのに。

やめろという言葉は、続けろという言葉以上に、受け入れてはならないものなのに。
どうして人はいとも簡単に、続けることを止めてしまえるのだろうか。

「……俺、思うんだけどさ。アンタと俺と猶岳に、アンタが考へてるほどの差なんてない
んだよ、きっと」

不意に我妻が、そんなことを言つた。やけに真剣な表情で、こちらを見据えながら、続
ける。

「俺にはじいちゃんのしつけ方が合つてた。猶岳には合つてなかつた。俺は運良く人のままでいた。猶岳は運悪く、人のままでいるられない何かに遭つてしまつた——アソイツのことを斬つた時には、そんなことまで考えられなかつたけど……俺にも猶岳にもなり得たアンタのことを見てたらさ、なんか、そんな風に思つた」

「……そうかな。猶岳はともかく、俺は多分、おまえのようにはなれないよ」

そうだ。

俺はきっと、我妻のように感謝の念は抱けない。弱い自分を棚に上げ、厳しく当たる桑島慈悟郎を逆恨みして、けれども逃げ出すことも育ち切ることも出来ないまま、彼の下で無為の時間を送り続ける——そんなどうしようもない自分の姿が、いとも容易く頭に浮かんでしまうのだ。

「おまえ、自分で言つてただろ。鬼になつた猶岳と、それを止められなかつた自分が許せなかつたつて。自分が鬼になつたら、師の桑島さんが腹を切る羽目になるつていうのがわかつてて、それでも鬼になつた猶岳のことが許せなかつたんだろ。だからやつぱり、おまえは自力で踏ん張れる奴なんだと思う。猶岳と同じ立場になつても、鬼にならない

道を選べる——それがおまえだ、我妻」

「……アンタ、やけに俺のこと持ち上げるよね？ アンタの目に俺つてどんな風に映つてんの？」

「さつきも言つたろ。すごい奴だつて、そう思つてる。冗談だと思うなら、自慢の耳で感じ取つてみろ」

「いや、信じるけど——でも、何でいうかさ。何でもかんでも自分一人で出来るようになる必要なんて、ないのかもしれないって思つて」

「……？ どういうことだ？」

「アンタさ、愈史郎のおかげで逃げるの止めて、今こうやつて俺のこと手当してるわけじゃない？ それと同じでさ、猶岳が鬼になるつてとき、俺がアイツの近くにいたら——ぶん殴つても止めたのになつて、そう思つたんだよ」

それは。

今となつては叶いようもない、子供の夢のような話だつた。

「……ぶん殴つて、それから、どうするんだ？」

「それはわかんないよ。結局、アイツが鬼になつたはつきりとした理由も聞けなかつた

んだ。鬼になつた獵岳は、じいちゃんのことボロクソに言つてたけど——人間だつた頃は、先生なんて呼んで俺以上にじいちゃんのことを尊敬してたんだ。『正しく俺を評価する者につく』だとか、『爺が苦しんで死んだなら清々する』だとか——そんなこと、アイツが言う筈がないんだ。アイツが……』

『わからない』と我妻は口にした。けれど、その後に続く言葉が、雄弁にこいつの本心を物語つていた。

こいつはきっと、獵岳のことを、斬りたくなんかなかつたんだろう。許せるものならば、許してやりたかつたんだろう。けれど獵岳は、決して踏み越えてはならない一步を踏み越えてしまつた。鬼へと成り果てることで、実の師を死に追いやつてしまつた。どうなんだろうか。仮に我妻がその場にいたら、鬼へと墮ちる獵岳のことを、止められたんだろうか。

わからない。

今となつてはもう、誰にも、答えの出せないことだ。

「——だからさ。アンタもあんまり、自分のことを責めないでよ」「……え」

唐突に。

猿岳の話から、俺の話へと議題がすり替わった。

「確かに、アンタの心は弱かつたのかもしない。一度は折れたのかもしない。でも、何だかんだでアンタは今もここにいるじやんか。自分一人の意思じゃなくつても、誰かに無理矢理引っ張られた結果でも、弱い自分を何とかしたいって、そう思ってるじやんか。だから——上手く言えないんだけど、アンタが自分で思つてるよりも、アンタは丈夫なんだよ。きっと」

「……そうなのかな。きっと俺は、次に同じようなことがあつても一人じや決断できないぞ」

「うん。だからさ——俺たちみたいなのは、誰かに無理矢理ぶつ叩いてもらつて、それでようやく一人前になれるんだと思う」

「それは、人によつてはあまりに惰弱だと、斬り捨てられてしまいそうな言葉だつたけれど。」

俺が俺で在り続けるための、答えになり得る、言葉だつた。

「猶岳のとき」と違つて、無惨とやり合ふのは本当に怖かつたよ。元を辿ればこいつが全部悪いっていうのは、わかつてたんだけど——やつぱりそれは、ただの理屈なんだよ。だから、アンタが無惨にビビッて動けなかつたっていうのは、わかるよ。ホントによくわかる」

「……でも、おまえは最後まで戦えた。なんでだ?」

「だからさ。蹴つ飛ばしてもらつたんだよ、じいちゃんに」

——自分一人で、戦う意志を保てないというのなら。
誰かに無理矢理、背中を蹴り飛ばしてもらえばいい。

「……蹴つ飛ばされても、動けない奴は、どうなるんだ?」

「そりやもう、動けるようになるまで蹴つ飛ばしてもらうしかないんじやない?」

「……蹴りの痛みに耐えられなくて死ぬかも」

「うん。それは本当に俺もそう思つた」

「……キツツいな」

「キツツいよ。一人で踏ん張れない奴の人生っていうのはきっと、どんな時だつてしん

どいんだ。だけど——それ以外の道なんて、どこにもないからさ」

頑張れない人間にとつて、頑張れという言葉は、辛い。

辛いのだけれど。苦しいのだけれど。しんどいのだけれど。

それでも——結局は、頑張るしか、ない。

散々回り道をした末に、至極当然の結論に辿り着いてしまった。都合の良い答えを夢見ていた訳ではないけれど、もう少しこう何というか、手心をというか——それも所詮は、どうしようもない泣き言だ。口にしたところでどうにもならない、何の意味も持たない弱音だ。

俺はこの弱さを、切り捨てられるようになるんだろうか。一度折れた心から、決して折れない心を打ち直すことなんて、出来るのだろうか？

我妻善逸。俺の主張に理解を示し、共感し、重なる部分があると頷いてくれた男。彼自身の師と同じように、自分のことを諦めるなど、励ましてくれた男。

こいつのことを見下す。こいつのようになりたいと思う。こいつのようになれたらと、心の中で俺は夢想する。

夢想するけれども——なれる訳がないという諦めの言葉だけは、我妻と別れて部屋を出た後になつても、頭から離ることはなかつた。

さて。

次の部屋主は難敵だ。何と言つても、鬼殺隊屈指の何考へてゐるのかわからない男だ。何度か言葉を交わしたことはあるのだが、どうにも噛み合わないというか、ズレた答えが返つてくるというか——とにかく、個人的には苦手な男なのだが、彼もまた無惨との戦いで重傷を負つた者だ。手当をしないという訳にはいかない。

「失礼します」

「——ああ。入つてくれ」

許可が下りたので、扉を開けて部屋へと踏み込む。寝台の上に、半身を持ち上げ窓の外を眺めている一人の男の姿があつた。男には右腕がない。無惨との戦いによつて失

われたものだ。

ああ——俺が彼らの身代わりになつて死ぬ覚悟を持つていたなら、この右腕が失われることも、なかつたのだろうか？

「傷の具合の確認と、包帯の巻き替えに参りました。水柱殿」

そう言つて俺が頭を下げるに、その男——富岡義勇は、何故だか妙に改まつた様子で。

「そうだ。俺は水柱だ」

鬼殺隊の誰もが知つている事実を、確かめ直すように、断言した。

断髪式

富岡義勇は、生き残った隊士の中で最も傷の深い者であつた。

裂傷のみならず、全身に多数の打撃痕も残つてゐる。徒手空拳で戦うという、上弦の参との戦いで負つた傷だろう。『屈』と呼ばれる水の呼吸・拾壹の型——あらゆる攻撃を無に帰す富岡の絶技をもつてしても、これほどの深手を負わされるほどの激戦。俺如きでは到底、想像もつかない領域の争いだ。

尤も愈史郎曰く、これらの傷も数ヶ月ほどすれば概ね癒える見通しなのだという。尋常ならざる回復力と言わざるを得ないのだが、その理由と代償についても聞かされているので手放しに喜ぶ気にはなれない。何より――

『痣』の力を借りたところで、失われた右腕は二度と、戻つては来ない。

「…………」

断面に巻かれた包帯を剥がしながら、考える。

この腕の代わりに千切れたものが、自分の胴であつたなら。

富岡義勇の右腕と、俺の命。その価値は、どちらが上か。

心在る者は、後者であると言つてくれるだろう。けれど今の俺には、とてもじやない
が――

「考え方か」

その声でふつと我に返る。相変わらずの感情が読めない目で、富岡が俺の顔を見据えていた。

いかん。手が止まつてしまつていた。しつかりしろ、怪我人に気遣われていてどうするんだ。

「……申し訳ありません」

「責めている訳じやない。ただの確認だ」

「その――昨日の戦いのことを、思い返しております」

無傷で生き残った自分。取り返しのつかない傷を負つた富岡。

その対比について考える度、あの名も知らぬ隊士の絶叫が、頭の中に蘇つてくる。

『柱を守る肉の壁になれ！ 少しでも無惨と渡り合える剣士を守れ!!』

『今までどれだけ柱に救われた！ 柱がいなけりやとつくる昔に死んでたんだ！！ 脣するな戦え——っ!!』

臆した。

俺は、臆してしまった。

柱に救われた恩を返すことが出来ないまま、のうのうと生き残つて、しまった。

「申し訳ありません」

「それはもう聞いたぞ」

「いえ、そうではなく——自分は、務めを果たすことが、出来ませんでした」

気付いた時には、詫びの言葉が口を衝いて出ていた。無心で看病の真似事に興じることは、もう出来なかつた。

「柱の面々が鬼舞辻無惨と相まみえていたとき、自分もその場に居合わせておりました。ですが、自分は柱の盾となることも叶わず、あまつさえその場を逃げ出そうとさえして——竈門炭治郎が鬼と成ったときも、水柱殿の呼びかけに応じることが出来ぬまま、ただただ立ち尽くすばかりで……鬼殺隊士の面汚しです。命を落とした者達に、合わせる顔がありません……」

首を垂れて、固く瞼を閉じる。

そう、柱の身代わりになれなかつただけではない。無惨が灰と化した後、汚名を注ぐ最後の機会でさえも、俺は身動き一つ取れなかつたのだ。陽光が差し、鬼の魯威が取り扱われた筈の世界で、富岡の放つた叫びが思い起こされる。

『動ける者——つ!! 武器を取つて集まれ——つ!!』

『炭治郎が鬼にされた！ 太陽の下に固定して焼き殺す！』

『人を殺す前に炭治郎を殺せ!!』

富岡の判断は迅速であつた。結果的に竈門炭治郎は人の身へと戻つたとはいえ、取るべき対処としては間違いくなく富岡の行動が最適解であつた。そして俺は、あの場にいた

隊士の誰よりも、動かなければならぬ者の筈だつた。にも拘らず、進行していく事態を怯えて眺めていることしか出来なかつたのが俺だ。『穴があつたら入りたい』という言い回しは、きつとこういう時に使うものなんだろう。己の不甲斐なさを痛感し、深く恥じ入る気持ちになつた時の――

「わかるよ」

――え。

瞼を開き頭を上げると、相変わらずの無表情を浮かべた富岡の顔がそこにはあつた。機嫌が良いのか悪いのか、微塵も読み取れない氷の眼。^(まなこ)けれど今確かに、富岡は共感の意を俺に示した。わかるよ、と。

信じられない。このような惰弱な意思表示は、容赦なく切つて捨てる男だと思つていた。戸惑いを隠せない俺をよそに、富岡は言葉を紡いでいく。

「鬼殺隊に俺の居場所はない――そう思つていた時期が俺にもあつた」

「何を、馬鹿なことを……」

「正確に言えば、つい先日までそう思い続けていた」

何を馬鹿なことを。脳内で思わず繰り返してしまつた。というか、富岡も富岡で律儀に言い直すこともなかろうに。

富岡義勇の居場所が鬼殺隊にない。そんな馬鹿な話があるものか。いや、確かにこの男は周囲の人間と噛み合わないところがあるというか、一匹狼的な印象がなくはなかつたが、腕前については誰もが認めるところであつた。平隊士の誰もが憧れる、柱の一角に相応しい実力の持ち主だつた。そんな男が、己の存在意義について思い悩むなどと――

「俺は最終選別を突破していない」
「え……」

思いがけない告白に、顔をまじまじと眺めてしまう。しかし富岡の表情は変わらない。冗談を口にするような男でもない。ただひたすらに淡々と、現実のみを突きつけてくるのが富岡義勇という男だ。

そうして富岡は、自身の過去を露にする。最終選別の時、鎧兎という名の少年に救われたこと。一匹の鬼も殺すことなく、ただ生き残つただけの人間だということ。そのこ

ともあつて、自分が柱を名乗ることに躊躇の念を抱き続けていたこと——どれもこれも、富岡義勇という人間を傍目から眺めていただけの俺には想像もつかない新事実であつた。

「——今回もそうだ。俺はまたしても、守られてしまつた。おまえは自分が柱の盾になれなかつたことを悔やんではいるようだが……悔いがあるのは俺も同じだ」

「……」

「柱とはその名の通り、鬼殺隊の支えとなるべく襲名するもの——にも拘らず、あの時の俺たちは隊士たちに支えられる側になつてしまつた。俺たちの未熟と油断ゆえにだ」

そうだ。

いかなる時も、柱は鬼殺隊の支えとなる存在であつた。だからこそ、あの時の隊士たちも思つたのだ。その支えを崩してはならないと。柱が鬼殺隊を支え続けてきたから、隊士たちも柱を支えなければならぬと思つた。想い想われての顛末だ。誰が責めらるべき事態でもない、そう思う。

誰のことも想えなかつた、一匹のおれ鬼を除いては。

「……水柱殿、それは」

「わかっている。彼らの代わりに、俺が死んでいれば良かつたなどと口にするつもりはない。命を賭して俺を庇ってくれた、彼らの遺志を冒涜することになる——今はそのことに気付けている」

富岡の表情は変わらない。その感情を窺い知ることは出来ない。その上で、思つた。
 富岡義勇は変わつた。以前に比べて、自分自身を肯定する意志が強くなつたように感じられる。『俺は水柱だ』という発言にしてもそうだが、かつてはそんなことを言葉にする男ではなかつた。誰かに剣の腕前を持ち上げられても『俺は凄くない』『柱の名が与えられたのは何かの間違いだ』『失礼する』などと述べて、一方的に話を切り上げてしまうような男だつた。

それが今はどうだ。俺のような平隊士を気にかけ、理解を示し、自身の考えを淀みなく口にしている。良い悪いでいえば、間違いなく良い方向に変わつたのだろうが——いつたい何が、この男に変化を齎したのだろう。出来事か？ 或いは人か？ 人であるならば、それは果たして何者なのか？

——その何者かと言葉を交わせば、俺も良いものに変わることが、出来るのだろうか

「——だからおまえも、自分は死ぬべき人間だなどと考えるのはよせ」

そう語る富岡の姿が、我妻善逸と重なつて見える。『自分のことを責めないでよ』と口にした、あの勇敢なる臆病者と同じことを、彼とは似ても似つかないこの男が述べている。

何故だろうか。

そんな二人の背に、更なる誰かが重なつて見えるのは。

「時を巻いて戻す術はない。為すべきことを為せなかつたという後悔は、おまえに一生ついて回るものになるだろう。それでも——折れるな。自分の命に価値を見出せ。死ぬべきだつたと考えるのではなく、生き残つたことに意味があるのだと思え。……おまえが本当に、自分のことを不甲斐ないと思つてているのならな」

命の価値。

俺という人間が生き残つた、意味。

そんなものは、本当に、あるんだろうか。

自分のことを信じてみたい。他人に誇れる自分になりたい。俺はいつでもそう思つてゐる。思うだけなら誰にでも出来る。そこで行動に移せる者と、移せない者。その違ひは一体、何処から来るのか。その答えだけが、未だに見えてこない。

鬼狩りは異常者の集まりであると、鬼舞辻無惨は語つていた。その言葉を否定し切れない自分がいたのも確かだ。けれど同時に、俺はこうも思つていたのだ。

誰かのために命を懸けられることが異常であるなら、俺はむしろ、異常者になりたかつた。

命の価値を軽んじてゐる訳じやない。死を美化してゐるつもりもない。ただ、彼らの誰もが立派だった。己の務めを全うしてゐた。為すべきことを為した者達だった。そんな彼らと自身を比べる度に、どうしても思つてしまふのだ。彼らのようになりたかった。胸を張つて生きられる存在に、なりたかつた——と。

憧れが膨らめば膨らむほどに、理解することから遠ざかっていくのを感じる。なりたいと願えば願うほどに、なれないことを痛感する。思考に行動が伴わない。口先ばかりで、何も成し遂げられない。一体何なのだろうか、この生き物おそれは。

本当に、こんなものが正常だというのか？ 鬼舞辻無惨。俺が正常で鬼殺隊士の方が異常だと、本当にそう思うか？ 俺のような生き物で世の中が溢れ返っていたら、この世はきっと、どんどん良くないものになってしまふ。我が身可愛さに他人を救えない者。己の務めを果たせない者。心を燃やせない者。そんな人間の闊歩する世界に、一体何の未来が在るというのか。

変わりたい。

本当に、変わりたいと思つてゐるんだ。

その願望はどうやつたら、願望ではないものに、変わつてくれるのだろう。

「……俺の言葉では、届かないか」

え。

えらく悲壮感の漂うばやきが聞こえてきたのではつとして視線を向けると、相変わらずの無表情を湛えた富岡の顔が――

……いや、待て。本当にこれは無表情だろうか？ 心なしか目に光がないというか、

頭の上に『ずーん……』という擬音^{オノマトペ}が浮かんで見えるというか……沈んでいる？ 落ち込んでいるのか？ あの富岡義勇が？

そんな纖細な生き物だつたのか、この男。確かに変わつたと言ひはしたが、こういう方向に変容しているとは……いや、今まで俺が気付かなかつただけで、割と前から傷付きやすい性格だつたのかもしねない。

今更になつて思う。俺はもつと、鬼殺隊士の面々と触れ合つておくべきだつた。鬼を滅する刃の群れと、もつと深く関わつていればよかつた。覚悟もなく、矜持もなく、鬼殺隊という組織に属しているだけで、彼らと志を共に出来ていると勘違いをして——実際のところ、てんで理解が足りていなかつたことに、全てが終わつた後で気付かされる。

『時を巻いて戻す術はない』

先に放たれた富岡の言葉が、重く、ひたすらに重く、胸に圧し掛かつてくる。

やり直したいという願望は、どれだけ抱いても叶うことはない。鬼殺隊士としての務めを果たす機会は、最早俺には訪れない。その上で富岡は折れるなと言う。自分の命に価値を見出せと言う。生き残つた意味を考えろと言う。

堂々巡りだ。さつきから俺は、一步も前に進めていない。富岡が沈むのも無理は——

「……あつ」

——いかん。そういえば富岡に返事をしていなかつた。ただでさえ自身の励ましが通じなかつたことに傷付いている（多分）というのに、無視したとあつてはいよいよどん底まで沈みかねない。

違うんだ、富岡義勇。あなたを嫌つてているわけではないんだ富岡義勇。もつと自分を強く保つてくれ富岡義勇。言え。言うんだ。『俺は嫌われていな』と言える富岡義勇であつてくれ。

「も……申し訳ありません。大丈夫です水柱殿、あなたの言葉は、しつかりと耳に届いて

「茂生」

唐突に固有名詞で呼ばれた。そう——実に今更の話になるが、俺の姓は茂生という。名についてはどうでもいいだろう。どうせ誰も興味があるまい。姓についても、正直覚えておく価値はない。

「は、はい。如何なさいましたか」

「俺は人に頼みごとをするのが得意ではない」「はあ……」

自分で言つてしまふのか、それを。

……いや、その事実を自ら口にすることも、富岡に生じた変化の一つなのかも知れないが。

「だが——俺の利き腕は既にない。左手一本で行うには、困難な作業であると判断した。
だから、おまえに頼む」

「……？」

そうして富岡は、肘から先の失われた右腕を持ち上げかけ——軽く首を振つてから、
左手で自身の頭を指差して、言つた。

「髪を切つてくれないか」

本当は自身の師に頼もうと思っていたと、首から肩にかけて布で覆つた際に富岡は語つた。

富岡の師——元・水柱こと鱗滝左近次。顔立ちが余りにも柔和だつたがために鬼に侮られたことから、如何なる時も天狗の面を外さないようになつたと噂される男。彼は自身の髪を切る時、面を被つたままにしているのか、それとも流石に外して行うのか——そんな、下らないことを考えた。

もつとこういう下らしい話を、隊の皆々と交わしておけば良かつた——などというのは、余計に下らしい考え方だつただろうか。

「…………」

……なんともまあ、奇妙な話だ。

長年同じ隊に所属していながら、今日の今日までそれらしい交流のなかつた富岡義勇

の髪に鍔を入れてゐる。鬼も満足に斬れなかつた身で、仲間の髪を切つてゐる。理髪の刃だ。何を考えてゐるんだ俺は。

「生殺与奪の権を他人に握られている……」

そしてこの人はこの人で一体何を言つてゐるんだろうか。

「……俺が鍔で首を斬るとでも思つてゐるんですか、あなたは」

「そうじやない。ただ、今更ながらに実感しただけだ」

「と言ひますと」

「俺の右腕はもうないのだ、ということを」

しゃきり、と。

切り落とされた黒髪が、床に落ちて、散らばる。

髪は切つてもまた生えてくる。しかし腕は、そうはいかない。

富岡義勇は、人間であるが故に。決して鬼ではない、定命の者であるが故に。

「傲慢な物言いに聞こえるかもしれないが——他人に頼らなければ出来ないこともあるのだということを、改めて思い知らされた」

「……そりやあ、人は一人では生きられないですからね」

「そうだ。故に人間は、支え合う」

水柱として鬼殺隊を支え続けてきた男が、平の隊士に頭を預けたまま、そんなことを口にする。

『誰も彼も役には立たなかつた』と、鬼舞辻無惨は口にしていた。あの言葉がきつと、鬼という生き物の本質なのだろう。他人を当てにしない。敬わない。感謝をしない。自分だけが良ければ、それでいい。そんな自意識をただひたすらに煮詰めて出来上がったのが、あの生き汚さの塊だ。

それを強さだと錯覚しかけた時もあった。けれど奴の最期は、赤子の姿に形を変え、陽光の中で泣き叫びながら塵となつた無惨の散り様は、そんな錯覚を打ち碎くには充分過ぎた。

少なくとも俺は、あんな風には、死にたくない。

あの時、愈史郎に止められなければ——そう遠くない将来、似たような末路を迎えていただろうとも思うけれど。

「——この部屋に入ってきた時からずっと、おまえは何かを探し続けているように、俺の目には映つていた」

富岡がどんな表情で語っているのか、今の俺には窺い知ることが出来ない。彼の後頭部に視点を合わせたまま、無言で鍼を進めていく。

そうだ。俺はずっと探していた。折れた心を立ち直らせる術を。富岡の言を借りれば、俺という人間の価値を。生き残った意味を、俺は探し続けていた。

「だが——本当はもう、おまえは答えを知っているんじゃないのか」

「——え」

「おまえが今、自分で口にしたことだ」

『アンタが自分で思つてるよりも、アンタは大丈夫なんだよ、きっと』

再び。

水の柱を取り巻くように进る、金色の輝きが、見えたような気がした。

「人は一人では生きられない——そのことを忘れない限り、おまえが道を踏み外すこと
はない。——少なくとも、俺はそう思っている」

我妻善逸が、師に背中を蹴り飛ばしてもらうことで奮い立てたように。

富岡義勇が、自分一人では切れない髪を俺の手に委ねたように。

人間という生き物は、誰かに支えてもらうことで、生き永らえている。

漠然と日々を過ごしているだけでは、ふとした拍子に忘れてしまいそうになる、当然のこと。

そのことを、如何なる時であつても、頭に留めておく。

……なるほど。

確かにそれが、答えなのかも知れない。

わかつていた。

俺は何度も何度も、わかつていてるという言葉を、頭の中で唱え続けてきた人間だから。
目的地を知りながら道に迷い続けているということは、辿り着くための道のりを知ら
ないということだ。

即ち——俺はどうやつたら、その簡単な答えを忘れることなく、生きていくことが出来るのか。

他人を敬い、感謝し、誠意を尽くす。たつたそれだけのことを忘れないために、俺は何をすればいいのか。

本当に知りたいのは答えではなく、その過程なのかもしれない。そんなことを、思つた。

「……終わりましたよ」

細かい毛をさつと払つて、そう告げる。もちろん床は後で掃除する。

素人目には悪くない仕上がりだと思う。しかし何分、他人の髪に鋏を入れるなど初めての経験だ。自分の評価と他人の評価というのは、得てして釣り合わないもの。緊張しながら、そつと手鏡を差し出す。

「ああ——悪くない」

釣り合つた。ほつと一息を吐く。

こんな行いが、務めを果たさずに逃げ出そうとしたことの償いになるとは思つていなければ。

それでも、柱の要望に応えることが出来たのであれば、幸い――

「ありがとう」

その時。

重たくなつた髪を切り落とし、どこか涼やかな印象になつた富岡義勇が。
こちらを振り向いて、ごく自然に――本当に自然な笑顔を浮かべて、そう言つた。

「……あれ」

何故だろうか。

その言葉を耳にした途端、急に視界がぼやけて、俺は――

——誰かのために命を投げ出す覚悟はあるかと問われても、即座に頷ける気は、未だにしないのだけれど。

今。本当に今、この瞬間だけは。

誰かに尽くし、感謝されることの大切さに、気付けたような——

そんな気が、した。

煉獄に焦がれて

——その男の刃は、炎を纏つていた。

『悪鬼滅殺』の四字が刻まれた、燃えるように赫い刀身。繰り出される技は迅く鋭く、ひたすらに磨き上げられている。

どこまでも真っ直ぐで、曇りのない剣捌き。刀が振るわれる度に、雲が晴れて陽光が差し込んでくるような、鮮烈で、目を奪われる太刀筋。

男は戦っていた。男は護っていた。理不尽で容赦のない暴力を相手に、たつた一人で、傷付き、打たれながらも、決して膝を突くことなく。

『俺は俺の責務を全うする！　ここにいる者は誰も死なせない!!』

片目を失い、脇腹を血に染めて尚、男は吼えた。滾っていた。闘志を失つてはいなかつた。

俺は震えて動けないまま、その背中を眺めることしか出来ない。彼の戦いに割つて入

ることなど出来ない。そんな力もなければ、勇気もない。

それでもただ、ただひたすらに、祈つていた。

死なないで。

死なないで、下さい。

俺は貴方のこと、苦手でしたけど。どこまでも清らかで淀みのない貴方の近くにいると、薄汚い自分の性根が露になるようで、嫌でしたけど。

それでも本当に、貴方のようになりたいと、俺は思っていたんだ。

煉獄さん。

——煉獄さん。

師匠。

馬鹿みたいに眩しい、黎明の日差しで目が覚めた。

「…………」

夢だ。

クソみたいな夢だつた。

何が師匠だ。俺は結局、あの人の継子になんかならなかつたじやないか。『玖ノ型は煉獄家相伝の奥義！　俺の下でなければ学べないぞ！』などと言つてよく絡まれたものだが、いや俺そもそも伍ノ型までしか使えませんし。陸から捌ノ型すらよく知りませんし——そんな建前を並べ立てて、逃げ回つて。

それで結局、永遠に教えを乞う機会を失つてしまつた。

別に俺が特別、あの人に目を掛けられていた訳じやない。自分と同じ炎の呼吸を使う隊士には、分け隔てなく声を掛けるのが煉獄杏寿郎という男だつた。俺のような木つ端隊士であつても。

誘いを受けなかつたのは、単に自信が無かつたからだ。柱稽古で改めて痛感したことだが、柱の鍛え方は育手のものとは比較にならないほど辛く、厳しい。実際に俺の他に誘いを受けていた隊士たちも、あの人の鍛錬についていけず逃げ出すのが常であつた。

唯一の例外といえば、彼の繼子から柱の地位まで上り詰めた甘露寺蜜璃くらいのものであつたが——逆に言えば、柱になれるほどの素質がなければ、あの人の繼子は務まらなかつたという意味でもある。

いずれにせよ、全てはもう、終わつたことだ。

煉獄杏寿郎は既にこの世の者でなく、彼が生涯を賭して戦い続けてきた鬼も、たつた一人と一匹を除いてその全てが滅びた。

もう二度と、彼のように心を燃やして戦う機会など、訪れないのだ。

俺には。

——そう理解していながらも未練がましく刀を握つてしまふのだから、身体に染み付いた習慣というものは恐ろしい。

「九百三十一、九百三十二、九百三十三、九百三十四……！」

富岡義勇の前で思わぬ醜態を晒してしまつてから、更に一夜が明けて。蝶屋敷の庭で一人、朝の素振りに励む。

こんなことを続ける意味などもうないというのに、それでも刀を手放せずにいるのは、後悔ゆえのことだろうか？ 斬るべき者を斬れなかつたこと、為すべきことを為せなかつたことへの惨めな妄執が、俺の身体を突き動かしているのだろうか？

「九百九十七、九百九十八、九百九十九——千つ！」

雜念を頭から拭えぬまま、義務のように数だけをこなす。

息が上がつている。たつた千本の素振りでこの様だ。優れた剣士であればこの程度、鼻歌混じりに終わらせてしまうことだろうに。日輪刀を振るう者として、呼吸の乱れは剣の乱れだ。全集中の呼吸が途絶えてしまつてゐる。柱への第一歩と言われる、全集中の呼吸・常中。俺は未だに、一步目すらも踏めていない。

踏み出すことすら出来ないまま、全てが終わつてしまつた。

「……畜生」

馬鹿じやないのか？ 今更強くなつて何になるんだ？ この刃で一体誰を斬ろうつていうんだ？

傍から見たら誰もがそう思うんだろう。安心してくれ、世界の誰よりも俺が一番そうだ。

思つてゐるが——それでも尚、夢の中で視たあの炎が、俺の心を焦がして止まないのだ。

”——炎の呼吸・壱ノ型”

単調な素振りを終え、続けて型の稽古に入る。肺に空気を取り込み、身体に熱を巡らせていく。

秀でた呼吸の使い手が振るう刃は、見る者に炎や水を幻視させる。実際に刀が燃えたり濡れたりしている訳ではないのだが、何故だか知らないがそう見えるのだ。日輪刀を持つ特性の一つなのかもしれない。

それ故に一部の隊士の間では、日輪刀に呼吸を纏わせることが出来るかどうかが、一流と二流の境目になるのだという説も唱えられていたりした。根拠と呼べるもののは何

もないただの珍説だが、あながち的外れでもないんじやないかと俺は思つてゐる。何せ

”不知火”

——七年余りを費やして尚、俺の刃に炎は宿らない。

力強く踏み込んだ一足で相手との距離を詰め、横薙ぎに斬り払う。足と腕に満遍なく呼吸を行き渡らせるのがこの技の神髄なのだと育手には教わつた。逆に足のみに意識を集中させ、弓矢の如く極限まで引き絞つてから放つのが『霹靂一閃』と呼ばれる雷の呼吸・壱ノ型であるとか。風の噂によれば、壱ノ型でありながら雷の呼吸において最も習得難度が高い技であるとも——閑話休題。

刃は虚しく空を切る。当然だ。そこには鬼も蛇も潜んではいない。この世の何処にも、もうそんなものは残つちやいない。愈史郎と猫のことは置いておくとして。そもそも、あいつは鬼であつて鬼ではないというか、単に陽の下を歩けないだけの人間も同然というか——とにかく。

踏み込んで、斬る。踏み込んで、斬る。見えない敵に挑みかかるような滑稽な鍛錬を繰り返し、胸中で自問する。

……俺は一体、何を斬るために刃を振るつているのだろう？

——屋敷の廊下を歩いていたら、不意に焦げ臭い匂いがした。

「火事か!?」

「うわあ!! び、びっくりした……急に大声出さないでお兄ちゃん」

左目のみをくわつ！ と見開き叫び出した竈門炭治郎を、隣を歩く妹の禰豆子が窘める。炭治郎は長男であつた。長男は声も反応も大きかつた。長男とはそういうものだつた。

炭治郎の右目は眼帯によつて覆われている。無惨との戦いの最中に潰れて、鬼となつた際に眼球こそ再生はしたもの、人間に戻つて一夜明けたら再び見えなくなつてしまっていた。左腕も似たようなもので、一度完全な状態で生え変わった筈のそれは、今

や枯れ木の如く皴々になつてゐる。尤も、どちらも一度は丸ごと失つたものなのだからと、炭治郎はあまり気にしていなかつたが。

それよりも火事だ。せつかく禰豆子が人間に戻つたのだから二人で屋敷を散歩でもしようと思い立つたはいいが、その屋敷が焼け落ちては散歩どころの話ではない。火の出所を探るべく、炭治郎は鼻をすんすんと鳴らして——そしてすぐに、自身の早合点に気が付いた。

これは人の匂いだ。

必死になつて、何かを燃やそうとしている人がいる。けれども、上手く火が点かずに燃り続けている——そんな感じの匂いがする。善逸の匂いにやや似ているが、彼と違つていつまで経つても火が点きそうな予感がしない。点け方が間違つているのか、そもそも肝心の火種が足りないのか——とにかく、嗅いでいるとどうにも落ち着かなくなる類の匂いだ。

「ていうか、えつ？　えつ？　火事？　うそ、大変じやないお兄ちゃん！　すぐに消さないと！」

「いや——ごめん禰豆子、勘違いだつた。……あと、出来ることなら消すんじゃなくて、点けるのを手伝つてあげたいな」

「お兄ちゃん放火魔になつたの!?」

「違うぞ!? そうじゃなくつて、なんていうか——そう、焚火だ! 焚火をしようとしてる人がいるんだよ禰豆子!」

「あ、そななんだ? それなら力になつてあげないとだよね、炭焼き小屋の息子と娘として!」

「ああ、炭焼き小屋の息子と娘としてだ! 行こう禰豆子!」

「うん!」

竈門兄妹はお人好しであつた。数年ぶりに取り戻した人間としての憩いの時間を、見知らぬ他人の手助けに費やしてしまえるのがこの二人であつた。

すんすん。すんすん。嗅覚という名の第六感を頼りに、匂いの大元へと歩を進めていく炭治郎。禰豆子は炭治郎の左手を取り、兄の隣を並んで歩きながら、言つた。

「右、気を付けてね」

「うん。ありがとうな」

声にしてから、炭治郎はもう一度内心で同じ言葉を唱えた。ありがとうな、禰豆子。

禰豆子は今、俺を支えてくれている。不自由になつた左手では何かあつたとき咄嗟に動かせないから、左に立つことで俺を守つてくれているんだ。それでいて、見えなくなつた右目の心配もしてくれる。俺は鼻が利くから見えないことへの不安は小さいけれど、本当は右の方にも並んで歩きたいんじゃないだろうか。

苦労かけてごめんな、禰豆子。そうやつて謝るとおまえは怒るから、決して口にはしないけど。

『両手に禰豆子ちゃん……両手に禰豆子ちゃん!! なんだそれどこの天国だ!? ねえ炭治郎代わつて！ ちよつとでいいから俺にその立ち位置を味合わせてええええええええええええ!!』

はいちよつと静かにしてください。

どうやらこの火を起こしている者は、屋敷の外にいるらしい。門——いや、庭の方だろうか？ すんすん。すんすん。

徐々に匂いが濃くなつていく。相も変わらず火とも炎とも呼べない煙たさを感じるのだが、その中にほんの少し、ほんの少しだけ——嗅いだことのある匂いが混ざつている。

暖かく、優しく、それでいて力強い。そんな匂いのささやかな名残が、漂つてくる。
これは、まさか――

「……あ」

そうして、庭先に出た炭治郎と禰豆子の視線が捉えたものは、
庭の真ん中、虚空に向けて一心不乱に斬りかかり続ける、独りの鬼殺隊士の姿であつ
た。

地を蹴つて、薙ぐ。地を蹴つて、薙ぐ。反復縦跳びとでも言えばいいのか、ひとたび
刀を振つてはその場を振り向き、同じ動作を繰り返している。技の稽古の最中であるよ
うだが、見覚えのある動きだなど炭治郎は思つた。目で追えない感じた彼の踏み込み
に比べれば、遙かに緩慢な速度であれど――炎を巻き上げるようなその力強い踏み込み
を、炭治郎は知つていた。

炎の呼吸・壱ノ型、不知火。

「はあ――」

幾度かの反復をこなした後、男は次の動作に移つた。

足元から弧を描くように、赫色の刃が突き上がる。その軌道はさながら日輪の如し。炎の呼吸・式ノ型、昇り炎天——これは不知火よりも間近で見たからよく覚えている。情けなくあの人人の足元に寝転がり、見上げることしか叶わなかつたけれど——鮮明に、鮮烈に。

ただ、彼の刃と目の前の男が振るう刃、その決定的な違いと言えば——

「……火点けてる人、いないね？」

庭をきよろきよろと見回しながら、禰豆子がそう口にする。

そう——男の刃に、煉獄杏寿郎のような焰は感じ取れない。日輪刀の色はうつすらとはいえ赤く染まつてゐるから、炎の呼吸に適した体質の持ち主であることは間違ひないのだが……流石に握力で染めている訳ではないだろう。万力の赫刀使いがこんなところに潜んでいたら、驚天動地どころの話ではない。

それでも思わず、懐かしさを感じてしまう太刀筋だ。炭治郎は暫しの間、男の繰り出す技を眺め続けた。禰豆子もそれに倣い、兄妹の視線が男に集中する。それ故か——不意に男がこちらを振り返り、その視線が炭治郎とかち合つた。

「「あ」」

互いに間の抜けた一声を発した後、先に新たな反応を見せたのは男の方だつた。責め立てられているかのように表情を歪め、逃げるよう目を伏せて、振るつていた刀を鞘に納めてしまう。

炭治郎の眼差しに対する、あからさまな拒絶の姿勢であつた。

(えつ？……ええ!?)

炭治郎は困惑した。避けられている。理由はさっぱり理解らないが、自分はこの人に避けられている。何故だ？ 照れ屋か？ 照れ屋なのか？ それとも自分は、それほどまでに不躾な視線をこの人に投げかけていたのだろうか？ だとしたら申し訳ないぞ。鍛錬の邪魔をしてしまつた。

「あの、すみません！ どうか俺たちにお構いなく！ 続けて下さい！」

その場をそそくさと立ち去ろうとする背中に声を投げかけると、男はびくりと肩を震わせ、あからさまに嫌そうな顔で炭治郎へと振り返った。お願ひだから話しかけないでくれと言わんばかりの表情だったが、今の炭治郎は『自分が邪魔してしまった鍛錬を開させてあげなければならない』という使命感に囚われ、それ以外のことを考えられなくなっていた。炭治郎は頭の固い男だった。

「……いや、もういいんだよ。続ける意味もないのに、馬鹿なことに勵んでいた。終わりにする」

何よりも炭治郎は、己の嗅覚に絶対の信を置いていた。その鼻がこう告げてくるのだ。

この人は嘘を吐いている、と。

もういいだなんて、そんなこと微塵も思ってはいない。本当は成し遂げたくて仕方がない何かがあるのに、そこに辿り着くための方法を知らないまま、我武者羅にもがいでいる——そういう匂いがするのだ。本当に、心の底からもう止めたいと思つてているのなら、流石の炭治郎も大人しく引き下がるだけの分別は持つている。

不死川兄弟然り、謝花兄妹然り——自身の感情と正面から向き合えない者は、得て

して諍いを起こしてしまったのが、竈門炭治郎という人間の短所であり、ある意味では長所でもあつた。

故に今回も、こういう感じになつた。

「いえ、意味がないなんてことはない筈です。続けましょう」

「……だからもういいんだつて。鬼もいなくなつたつていうのに、鍛錬なんか続けて何になるつていうんだ。止めだ止め」

「それでも続けましょう」

「あのな、おまえ人の話を——」

「俺も一緒に刀を振りますから続けましょう!!」

「意味わからんねえよ頭固い野郎だなてめえは!?」

「こういう感じになつた。

ぎやーぎやーと不毛な押し問答に興じる少年二人。こういう時に炭治郎の調停役を務められる者が長らく不在だったのだが、今はもう、そうではない。

「もー、嫌がつてる人に無理強いしたら駄目だよお兄ちゃん？——すみません隊士さ

ん、うちの兄が騒がしくしてしまって」
「え……あ、ああ……」

「へこりと頭を下げる禰豆子に、男が曖昧な相槌を返す。続けて禰豆子は炭治郎へと向き直つて、

「それにお兄ちゃん、一緒に刀を振るだなんて言つたけど——本当に、この左手で刀を握つたり振つたり出来る？ 刀つて重たいんでしよう？ 右手一本でやるなんて言つたら止めるからね、私」「うぐつ……」

眉を逆さのへの字に曲げてそう言いつけてくる禰豆子に、二の句を告げなくなる炭治郎。

そういえばそうだつた。勢いで口にしてしまつたが、自分はもう剣士としては再起不能の身であつたのだ。左腕の肘から下は既に感覚がなく、今も禰豆子に握られていいながら、これっぽつちも熱や感触が伝わつてきていない。
……参つたな。こんな身体で、ヒノカミ神楽を舞い続けることは出来るだろうか？

無惨はもう滅びたとはい、縁壱さんがこの世に生きていたことの証であるあの舞は、出来る限り後世に伝えていきたいと思つていたのだけれど――

——いや、それは單なる俺の自己満足だろうか？　ヒノカミ神樂が縁壱さんを祀るためのものだというのなら、この神樂を終わらせることで初めて、縁壱さんは人の身に戻ることが出来るんじやないだろうか？　鬼舞辻無惨を討ち果たすために天から遣わされたヒノカミ様から、何のしがらみもなく幸福な人生を歩む、ただの継国^{にんげん}縁壱へと。

輪廻転生。そんなものが本当にあるのかはわからないけれど、俺は信じてみたい。

何十年、何百年掛かるかはわからないけれど――平和のために鬼と戦い命を落とした人たちが、生まれ変わつて幸せに生きている。そんな未来が来ることを。

……なんだか思考が逸れてしまつた。とにかく、今は目の前の隊士の話だ。彼が何に思い悩んでいるのかは知らないが、自分に出来ることがあるのなら力になつてあげたい。そう思つて男の方に向き直ると、彼もまた炭治郎へと視線を向けていた。どこか恐る恐るというか、怖がられているような匂いがするのは何故だろうかと思いつつ。

「……わかりました、続けましょうとはもう言いません。ですが一つ、お伺いしてもいい

ですか」

「……なんだよ」

男の眉根が露骨に寄つて、こちらを訝しむような表情に変化する。けれども、その程度の反応で踏み止まる竈門炭治郎ではなかつた。
如何なる時も真正面から、馬鹿正直にぶつかっていくのが、この少年の精神性なのだつた。

「——あなたは一体、何に火を点けるつもりで刀を振るつていたんですか？」

——叶うことなら二度と、顔を合わせたくない相手だと思つていた。
この少年の顔を見てみると、どうしても思い出してしまうから。俺の心が決定的にへし折れた、あの夜のことを。
あの言葉の、ことを。

『存在してはいけない生き物だ』

わかっている。

あの言葉は直接、俺に向けて放たれたものではない。鬼舞辻無惨の主張に同調しかけていたところで耳にしたものだから、なんというか、流れ弾を食らつただけだ。竈門炭治郎は今のところ、俺に向けて何の悪感情も抱いてはいない筈なのだ。多分。

……けれどもし、あの冷え切った眼差しが、俺に向けられる時が来たとしたら？
無惨の主張は利己的で、見苦しく、浅ましい。そのことを今の俺は理解している。けれど、その浅ましさを捨てきれない自分がいることも、俺は知っている。

もしも竈門炭治郎が、そんな俺の内面を察してしまつたら——そう思うとどうしても、この少年と言葉を交わすことが恐ろしくて堪らなかつた。

「——あなたは一体、何に火を点けるつもりで刀を振るつていたんですか？」

けれど、竈門炭治郎は俺を逃がしてはくれない。うんざりするほど真っ直ぐに、朗らかに俺を追い詰めてくる。

その嫌気が差すほどの眩しさが、誰かに重なつて見えた。あの人の傍にいる時も俺は、こういう居心地の悪さを感じていたことを、思い出した。

「……心を燃やせ、か」

かつてあの人投げかけられた、そんな言葉を思い出す。

『心を燃やせよ、諸角少年!!』

諸角って誰ですか。俺は茂生モブです。こちらの茂みに生えてる、雑草のような名前の生き物です。当時の俺はそんな突つ込みを入れるのが精一杯で、その言葉に籠められた力をまるで理解していなかつたけれど。

城の中で一人生き残った時、或いは無惨の腕が柱たちへと襲い掛かった時、俺の心にその言葉が残つていれば——俺も皆のように、鬼殺隊士としての務めを全うすることが出来たのだろうか？

……無理だろうな。

無理だという言葉の方が、あの人言葉よりも遥かに重いと感じてしまう人間なん

だ、俺は。

太陽のようなあの人眩しさに憧れて、焦がれて、手を伸ばして。
それでも結局は、自分自身の腹の底に潜むどす黒いものに飲まれて、独りで勝手に沈
んでいく。

そういう、生き物なのだ。

「……やつぱりまだ、燻っていますよね？」

だというのに。

この少年は今も尚、俺の中にも炎が残っていると言う。

どうして。

どうしておまえ達は、誰も彼も皆、そうなんだ。

『——おまえはどつちだ、醜男。踏み止まるのか、それとも転げ落ちるのか』

『アンタが自分で思つてるよりも、アンタは大丈夫なんだよ。きっと』

『死ぬべきだつたと考えるのではなく、生き残つたことに意味があるのだと考えろ』

おまえ達は、どうして。

俺が俺を諦めることを、諦めてはくれないんだ。

「……竈門炭治郎」

「!? は、はい！ 竈門家長男、竈門炭治郎です！」

「長女の竈門禰豆子です」

名前を呼んだら無駄に丁寧な自己紹介が返ってきた。ついでに妹までついてきた。今更ながら、この天真爛漫を絵に描いたような少女が鬼と化していたとは信じられない。鬼だつた頃の彼女を目にしたことがないので、想像することすら出来ないが——今となつてはもう、どうでもいい話だ。

「俺からも一つ、おまえに訊ねたいことがある」

あの人気が最期に何を為したのかは、上からの伝達によつて聞き及んでいる。無限列車——二百人余りの乗客を誰一人として死なせることなく守り切つたという、鬼殺隊士の鑑と言ふべき散り様。

けれど、俺は更にその先を知つてみたいと思つた。もう一度だけ、あの輝きに手を伸ばしてみたいと思つた。

どす黒いもののそのまた奥に、消えることなく燃え続けている炎があるのだと、信じてみたかつたのだ。

「あの人——煉獄杏寿郎の最期は、どんなものだつた?」

——あなたを想うとき、燃えるような力が体の奥から湧いてくるのです。

そんな言葉を言えるような生き物にんげんに、なつてみたいんだ。俺も。

無惨との最終決戦にうつかり紛れ込んでしまった茂生大志郎の話

「——煉獄というのは、天国にも地獄にも辿り着けなかつた死人の魂を清める場所なのだそうだ」

いつだつたか、あの人の屋敷にお邪魔する機会があつた時のことだ。客間で雑談に興じてゐる最中、そんなことを言われた。

聖人でもない限り、一生のうちに誰もが多少は罪を犯してしまうもの。地獄に落ちるほどの大罪でもない、ささやかな穢れを抱えて命を落とした者は、煉獄の炎に焼かれることで魂を浄化され、その後に天国へと至ることになるのだという。

「誰から聞いたんですか、そんな話」

「俺の母だ！ 母上からは、俺が俺として生きていく上で大切なことを幾つも教わつた！」

「そりやまあ、羨ましい限りですね」

皮肉めいた言葉を返してから、すぐにしまつたと思つた。煉獄杏寿郎の母親は既にこの世の者ではないと俺は知つていたのに、ついつい僻むような返答になつてしまつた。尤も親を亡くしているのは俺も同じなのだが、それにしたつて羨ましいという言い方は違うだろう。気を悪くされても仕方がない。

「ああ！　自慢の母上だ！」

逆だつた。本当、言われたことを素直に受け取るよなこの人は……まあ、こちらの捻くれ具合が伝わらなかつたようで安心したけれども。

両親に愛されていなかつた訳ではない、と思う。虐げられた記憶はないし、飯も充分に食わせてもらつた。早く自分も大人になつて、育ての恩を返さなければならぬと思える程度には、大切にしてもらつていた——筈だ。

しかし改めて思い返してみると、煉獄さんのように『俺が俺として生きていく上で大切なこと』なんてものを授かつた憶えは、何もない。そういう人生論めいた話を両親から聞かされたことは、一度としてなかつた。

もう少し俺が成長するまで生きていたのなら、或いはそういう話もしてくれたのかも
しない。けれど、九歳だ。九歳で俺は両親を亡くした。頭も心も育ち切っていない餓
鬼に小難しい話はまだ早いと、両親はそう思つていたのかもしれない。

かもしれない、だ。全部。

二人纏めて鬼に喰われた今となつては、もう。

「……『幾つも』って言いましたけど、他にはどんなこと言つてたんですか、お母様は」
「ふむ？ そうだな——」

そのせいか、つい気になつてしまつた。柱きつての人格者として隊士の皆に慕われ、
憧れの存在として扱われている男、煉獄杏寿郎。その人間性の礎となつたであろう母親
の教えとは一体、どういうものなのかと。

煉獄さんは顎に手を当てて、記憶を辿るように虚空へと視線を巡らせ——

『——なぜ自分が人よりも強く生まれたのか、わかりますか』

普段の騒々しい口調が嘘のよう、肅々とした声色で語り出した。

『弱き人を助けるためです。生まれついて人よりも多くの才に恵まれた者は、その力を世のために使わねばなりません。天から賜りし力で人を傷つけること、私腹を肥やすことは許されません』

恵まれた才能を自分のためではなく、世のため人のために。

煉獄杏寿郎はある意味、鬼殺隊士の中でも異端者だ。鬼に身内を奪われた者、人生を狂わされた者が大半の鬼殺隊にあって、彼にはそういう陰惨な背景が存在していない。先祖代々炎柱を務めてきた煉獄家の嫡男であるからという、一種の義務感によつて彼は戦つている。

そんなもののために命を懸けられるものなのかと、俺はずつと疑問に思つていたものだ。現に彼の父親である煉獄楨寿郎も、妻を亡くしてからは酒に溺れ、柱としての務めを投げ出し、半ば息子に全てを押しつけるような形で引退してしまつた。実の父親の心が折れる様を誰よりも間近で見てしまつた筈のこの人が、如何なる時であつても気力に満ち溢れ、決して折れず、挫けないのは何故なのか――

『弱き人を助けることは、強く生まれた者の責務です。責任を持つて果たさなければな

らない使命なのです。決して忘れることがないように——』と！　このように言われたな！』

「……一字一句丸々覚えたんですか？」

『決して忘れることがないように』だからな！』

『そういう意味で言つた訳じやないと思うんですけど……』

その答えがきつと、この言葉なのだろう。責務。責任を持つて果たさなければならぬ使命、か。

正直な話——俺にはまるで、理解が出来ない考え方だ。自分の才能を自分のために利用して何が悪いのだろうか？　自分の人生なのに、自分に与えられたものなのに、何故それを他人に施すことを強いられなければならないのか？　そんな利己的な考えが、次から次へと浮かんできてしまう。

……それに。

こんなことを口にするのは、故人に対しても煉獄さんに対しても失礼だとは思うのだが——

「……なんていうか、重たくないですか？　その教え」

煉獄瑠火の教えはまるで、煉獄杏寿郎に科せられた呪いのようだ。責務だの使命だのと聞こえはいいが、結局のところは彼にとつての枷ではないのか。世のため人のため、自分以外の何かのために生きるのが彼の定めだというのなら、彼自身の幸福は一体どこにあるのか——そんなことを、思つてしまつたのだつた。

ところが。

この人の母も母なら、息子も息子であつた。

「重いな！だからこそ背負い甲斐がある！」

「……なんですか、それは。普通は逆でしよう、重たいものなんて放り出してしまえばいいひつて、そう思つたことはないんですか？」

今にして思えば、つくづく性根の腐り切つた台詞だ。こんな台詞を柱相手に口にしてしまう人間だから、肝心な時に務めを果たせず、惨めに逃げ出す羽目になつたのだろうと、今では思う。

そんな俺を軽く戒めるかの如く、あの人はいつもの調子でこう切り返してきた。

「それもそうだな！ では少年、君が俺の代わりに炎柱を務めるというのはどうだらうか！」

「はア!? いやいや、無理！ 無理ですって！ 俺の階級知つてますか？ 辛ですよ辛、下から三番目！ 鬼だつて五十どころかその半分すら倒せてないし、十二鬼月を斬るなんて夢のまた夢——」

「だろうな！ ——だからこそ、俺が背負うのだ。少年」

今度こそ俺は、二の句が継げなくなつてしまつた。

そう——誰かが背負わなければならぬ。この世に鬼が生きている限り、人を喰らう化け物共が蔓延つてゐる限り、誰かがそれを祓わなければならぬ。別にいいじやないか、自分には何の関係もない、放つておけばいい——そんなことを言える奴はただの幸せ者だ。大切なものを誰かに奪われたことのない、恵まれた人生を過ごしてきた奴だ。心底羨ましいよ、本当に。

……そうだ。俺は鬼を赦せない。両親を俺から奪つていった、畜生共のことを赦せない。だから俺は鬼殺隊士になつた。刀を取り、育手に鍛えられ、鬼と戦う日々へと身を投じたのだ。

「……もう一つ、訊いてもいいですかね」「ああ構わんぞ！ どんと来い、少年！」

なればこそ。

なればこそ俺は、『自分に代わって柱を務められるか』というこの人の問いかけに、『はい！ やります！』と頷ける自分でなければ、いけなかつたんじやないだろうか。

「——人よりも弱く生まれた者は、どうやって生きていけばいいと思ひますか？」

俺には才能がなかつた。正確に言えば、中途半端な才能を持つて生まれてしまつた。

皆無という訳ではなかつた筈だ。日輪刀の色が変わつたということは、最低限の剣才はあつたという証明にはなる。けれども、それ止まりだつた。全集中の常中は未だに身に付いていないし、刀に呼吸を纏わせるこども出来ていない。華々しい活躍を続ける柱たちに比べれば遙かに劣る、雑草モクナゲも同然の鬼殺隊士。それが俺だ。

いつそのこと、色なんて変わらなければ良かつたのだ。あの初めて手にした日輪刀の鮮やかな赫色が、俺に夢を見せてしまつたのだ。自分もこの色のようになれるんじやな

いかと。燃えるような赫色を、眩いほどの日輪を、この身に宿すことが出来るんじやないかと、思つてしまつたのだ。

その勘違いを捨てきれないまま、未だに俺は、慘めつたらしく鬼殺隊士を続けているけれど。

両親の仇は討ちたい。強くもなりたい。けれども一向に強くなれる気配もない、半端者の俺は。

一体、どういう心構えで、生きていけばいいのだろうか。

「難しい問い合わせだな！」

本当にそう思つてゐるのか怪しい普段通りの大声で、煉獄さんは応えた。

「……難しいですか、やっぱり」

「実はかつて、千寿郎——俺の弟にも似たような問い合わせをされたことがある！ どれだけ稽古をつけても日輪刀の色が変わらないことに悩んでいてな、このまま剣士になることが叶わなければ、自分は一体どうすればいいのか——そんな悩みを打ち明けられたことがあるのだ」

「弟さんには、なんて？」

「どんな道を歩んでもお前は立派な人間になる！ 兄は弟信じている！ —— そう言つて励ましたものだが、君に同じ答えを返すのは説得力がないと判断した！ 故に悩んでいる！」

「……それはまあ、確かに」

アンタが俺の何を知っているんだとばかりに、糞みたいな反発をする自分の姿が容易に浮かんでくる。第一、俺には自分が立派な人間になれる未来など、これっぽっちも想像がつかない。

というか煉獄さん、悩んでいるのか。悩んでくれるのか、こんな甘つたれた問い合わせに。四の五の言つてる暇があつたら血反吐を吐くくらい鍛え直せ、くらいのことは言われてもおかしくないと思つていたのだが。いや、結構そういうとこあるだろ、鬼殺隊つて。

「——それでもやはり、俺はこう言おう！ いいか少年、君は俺とは違う！」

明後日の方向に視線を向けながら思考に耽つていた煉獄さんが、不意にこちらを真つ

直ぐに見据えて、語り始めた。

「弱いということは無力という意味ではない！ 人に比べて身体の弱かつた母が俺に人生の指針を示してくれたように、心持ち次第で成し得ることというのは幾らでもある筈だ！ 少年、君が己を弱き者だと思つてはいるのなら、弱い自分なりの精一杯をするといい！ 誰かと己を比較する前に、まずはそこからだろうな！」

「……自分なりの、精一杯……」

それは——なんていうか、どうなのだろうか。

俺の精一杯なんて、煉獄さんや柱たちのそれと比べたら、塵屑も同然のようなしょうもないものだと思うのだけれど。

……いや、そんな風にして誰かと比べるのを止めると、この人は言つてはいるのか。

確かに、俺の心が沈んでいく時というのは、常に誰かと自分を比べてはいる時のことだつたようだ。周りにはこんなにも出来る奴らがいるというのに、どうして俺は——そんな風に自分を責め立てて、腐つて、否定して。

誰も俺のことを追い詰めてなどいないのに、独りで勝手に沈んでいつて、這い上がれなくなる。そんな思考に蓋をして、俺は俺なりに頑張ろうと、そう言い聞かせながら生

きていけば——確かに今よりも多少、心は軽くなるだろうと思う。

ただ生きていくだけでいいのなら、それがきっと、一番の正解なのだろう。なのだろう、が。

「納得がいかない、という顔だな！」

「……いえ。正しいことを言われているのだと思うんですけど、なんていうか……胸のこの辺が、もやもやします」

脈打つ心臓を抑えるように手を添える。煉獄さんはそんな俺の動作をじつと眺めてから、一言。

「——やはり君も、炎の呼吸の剣士だな」

心なしか満足そうに、そんなことを、口にした。

「……は？」

「その靄というのは、君の中にある炎が燐つてることの顕れだろう！

君は自分を弱

き者だと思つているようだが、その一方で自分の弱さを認めたくないとも思つているのだろう！ 二律背反というやつだな！」

「そう……なんですかね？」

燻つてゐる。てんで実感が湧かない。俺の中にそんな、火を点けられる何かが眠つてゐるとは、とても思えない。そんなものがあるなら、俺はもつと自分を変えることに必死になれている筈だ。

口先ばかりで、願望ばかりで、てんで中身が伴つていなさい――

……そんなものを、炎と呼んでもいいのだろうか？

「――本当に今の自分を変えたいと思つてゐるのなら、そのもやもやを絶やさないことだ」

静かな語り口だつた。母親の言葉を借りてゐた時と同じような、教えを説く者の声をしていていた。

「君の中にあるその炎は、吹けば飛ぶような灯ともしづに過ぎないのかもしれない。ほんの一瞬、

「氣を抜いただけで消えてしまうような、ちっぽけなものなのかもしれない。それでも——そのちっぽけなものを守り抜くんだ。それだけでいい。それだけで君は、どこまでだつて強くなれる」

「……いつもの『心を燃やせ』ってやつですか？ そんなしょっぱい炎、燃やしたところでたかが知れると 思いますけどね」

「君は不始末で大火を起こしてしまった類の男だな！」

「はい？」

意味がわからん。そう思つて彼の顔をジト目で眺めてみると、煉獄杏寿郎は普段の呵々大笑たるそれとは違う、悪戯じみた含み笑いをうつすらと浮かべて。

「——初めは小火(ほや)でも、何かの拍子に大きく燃え広がることもある。……炎というのは、そういうものだぞ？ 少年」

いつだつたか。本当に、いつだつたか。

あの人は、そんなことを、言つていたのだつた。

「…………」

蝶屋敷のとある一室。竈門炭治郎が療養に使っている部屋へと招かれた俺は、寝台に腰掛けた彼の口から、あの人の最期の戦いがどんなものだったのかを、伝え聞いた。

下弦の壱を葬った直後、突如として姿を現した上弦の参。煉獄杏寿郎はそれに単身立ち向かい、夜明けが来るまで戦い抜いた。致命傷を負った身で尚、鬼の身体を掴んで離さず、朝焼けの下に滅しようとした。壮絶なる、散り様だつたと。

「猗窓座——上弦の参は、煉獄さんに何度も言つていました。死んでしまって杏寿郎、言え、鬼になるとと言え——それでも、煉獄さんは猗窓座の誘いを跳ね除けたんです。君と俺とでは物事の価値基準が違う、俺は如何なる理由があつても鬼にはならない……つて

「……そらうだらうな」

鬼になる。罪無き人の命を喰らう、畜生道へと墮ちていく。奴らの生き方は、煉獄瑠火の教えに真っ向から反しているものだ。そんな存在に、あの人が成り果てる筈もない。

煉獄さんは守り抜いた。竈門炭治郎を、無限列車の乗客たちを、誰一人として死なせなかつた。あの人は本当に、責務を果たしたのだ。強く生まれた者として、己の心を燃やし尽くして。

「——君は俺とは違う、か。……つくづくその通りだつたよ、煉獄さん」
「……？」

母親の教えに恥じない、強き者としてこの世を去つた煉獄杏寿郎と。あの人への教えを忘れて、弱き者として生き永らえてしまつたこの俺。違つていた。

本当に、何もかもが、違い過ぎた。

『——本当に今の自分を変えたいと思っているのなら、そのもやもやを絶やさないこと』

だ』

煉獄さん。

俺、駄目だつたんですよ。

折れてしまつたんです。絶やしてしまつたんです、心の炎を。
他人と自分を比べるなつて、弱い自分なりの精一杯をやれつて、あなたは言つてまし
たけど。

どうしたつて、比べてしまふに、決まつてゐるんだ。

——そんなにも立派に、鮮烈に、輝いておいて。
憧れない訳が、ないじやないか。畜生。

「——怒つてますか?」

そんな俺の胸中を、見透かしたように。

竈門炭治郎がまじまじと、俺の顔を覗き込んでいた。

「……そう見えるか？」

「いえ、その——なんていうか、そういう匂いがして」「お兄ちゃんは鼻が利くんですよ」

そう言つて話に入つてくるのは竈門禰豆子だ。彼女も煉獄さんの話に興味があつたようで、俺の隣に椅子を並べて炭治郎の語りに耳を傾けていたのだ。

「人の匂いを嗅ぐと、その人が何を考えているのか、どういう人なのかが何となくわかるんです。犬みたいでかわいいでしょ？」

「俺は可愛くないぞ！ むん！」

「この流れで鼻息荒くされると余計に犬っぽく見えてくるなおまえ……」

男らしさを主張したかったのかもしれないが、完全に逆効果であつた。

それにしても——匂い、か。我妻の『音』と似たような感覚なのだろうか。どっちも五感だし。確か竈門兄と我妻は同期で仲が良かつたと記憶しているが、似たような異能を持つ者同士の共感というか、そういうものもあつたんだろうか。特に興味はないけれ

ども。

……怒っている。

確かに俺は、怒っているのかも知れない。

煉獄さんに対するじやない。あの人の教えを忘れてしまった、不甲斐ない自分自身に腹が立つ。己のことを情けない、惨めだと思う負の感情に加えて、悔しいという気持ちが芽生えつつある。

あの時の俺は——鬼殺隊の制服を脱ぎ捨て、責務を全うすることなく逃げ出そうとした時の俺には、欠片も存在していなかつた感情だ。

けれど。

愈史郎に捕まつて、我妻善逸に共感を抱いて、富岡義勇の髪を切つて。
あの時よりも、少しだけ——自分以外の誰かのことを、考えられるようになつて。
そうしたら、気付いたら、赦せないようになつていた。

折れてしまつた自分のことを、燃やせなかつた心のことを、悔めるようになつっていた
のだ。

『——煉獄というのは、天国にも地獄にも辿り着けなかつた死人の魂を清める場所なの

だそうだ』

煉獄。

俺がこれまで触れ合ってきた者達はまるで、煉獄の炎のようだつた。

鬼殺隊士としての務めを全うする訳でもなければ、鬼へと墮ちきる訳でもなかつた半端者の俺を焼き尽くして、真っ新にする清めの焰。そんなものに焼かれ続けたおかげで、燃え移つてしまつたのだ。彼らの持つていた心の炎が、こつちにまで飛び火してきてしまつた。

今度こそ。

今度こそ、この炎を、俺は消さずに守り抜いていきたい。

鬼達との命の奪い合いに比べたら、遙かにささやかで、ちっぽけな戦いかもしれないけれど。

そのちっぽけなものを守り抜きたいと——今の俺は、そう思つてゐる。
そう、信じてゐる。

「……なあ、竈門炭治郎」

「どうしてあなたは俺を姓名で呼ぶんですか？」
「あなたの姓名も教えてもらつていいで
すか？」

「名字で呼んだら妹の方と区別がつかないだろ。仲でもない——茂生だよ。茂生大志郎」かといって下の名前で呼ぶほど親しい

「俺は別に気にしませんよ大志郎さん！」

「ちよつとお兄ちゃんと名前が似てますね大志郎さん」

「これ見よがしに名前で呼ぶな。……嫌いなんだよ、自分の名前」

大志郎。『大きな志』だなんて言えば聞こえはいいが、気持ちばかりで中身が伴つていては、何の意味もない。そんな風に思つていた。ともすれば、俺の捻くれた性根は、この名前への反発から生まれたものなのかもしれない——というのは流石に、こじつけが過ぎるだろうけども。

——ああ、でも。良い名前じやないかつて、あの人はそう言つていたつけな。『大志か
かの札幌農学校初代教頭、クラーク氏の残したとされる言葉だな！ B o y s,

良い名前だ!』なんて、いつもの大声で。

『……なんていうか、重たくないですか？』

……そうか。

きっと俺は、この名前のことも、そう思っていたんだろうな。

「……本当に、今でもまだ、嫌いですか？」

「そこまで行くと最早怖えよ、おまえの鼻」

「!？」

がーん……と衝撃を受けたように固まる竈門炭治郎。そんな兄の様子を見てくすぐり笑つている竈門禰豆子。何てことのない兄妹同士のほんの一幕が、何故だか無性に微笑ましく見えて。

今更ながら——俺にも妹がいたら、長男だつたら、もう少し逞しい人間になれたのかなあとか、そんなことを思つてしまつた。

……そうだな。俺も手に入れよう、自分以外の大切なものを。護るべきものを。妹は無理でも、妻とか子供とか、そういうものを。

こんな願望、今までほんの一度だつて、抱いたことがなかつたけれど。

大志を、抱いてみよう。

「……そんなおまえの自慢の鼻で、確かめてほしいことがある」

そのためにも。

俺はこの男に、竈門炭治郎に、白状しなければならない。

俺が犯した、煉獄に至るきっかけとなつた罪を、告白しなければならないのだ。

「——最後の戦いがあつたあの日、俺はおまえと鬼舞辻無惨の会話を聞いていた」「……？」

「無惨はおまえにこう言つたよな。鬼殺隊はしつこい、うんざりする、身内が殺されたから何だというのか——おまえ達は生き残つたのだから、それで充分だろう、と」

その言葉を口にした瞬間。

竈門炭治郎の目に、あの夜と同じ強い怒りが宿つたのを、俺は見逃さなかつた。

ああ——やはり。

こいつが誰よりも、あの人に近い。煉獄の炎をその身に宿している。穢れを赦さず、

払い、焼き尽くす——そういう炎を持つてゐる。

その炎が恐ろしかつた。こいつの目に見据えられて焼き尽くされることが、あの日の俺は怖くて仕方がなかつた。だから折れた。鬼舞辻無惨の力ではなく、こいつの高潔なる精神こそが、俺の心をへし折つたものの正体だつた。

その炎と、もう一度、真正面から向き合うのだ。

そうしない限り、俺は一生、大志を抱くことなんて出来やしない。

「——俺はある日、無惨の言うことに、心の底から同調したよ」

だから。

あの日の穢れを、折れた心を、逃げてしまつた俺の魂を。

焼き尽くしてくれ、竈門炭治郎。

「自分一人が生き残れたら、それでいいと思つた。両親を鬼に殺されたのに、鬼の生みの親である無惨を前にしても、仇を討つことが出来なかつた。柱が無惨に殺されそうになつた時、身代わりに飛び出すことも出来なかつた。そうして、そのまま、逃げ出そうとさせしたんだ。何もかもを放り投げて、命を懸けて戦つている皆のことさえも、知つ

たことじゃないと思つて——」

「…………」

「——あの日のおまえの言葉がずっと、耳に残つて離れないんだ。存在してはいけない生き物——おまえがそう称した無惨の主張に、俺はある時、同調したんだ。なら——俺もまた、そういうものになつてしまふんじやないか？　なあ、どう思う？」

「大志郎さん……」

竈門禰豆子が俺の名を呼ぶ。何を思つて口にしたのかはわからない。軽蔑されたのか、或いは憐れまれたのか、それとも——わからない。俺には竈門炭治郎のような鼻も、我妻善逸のような耳もない。他人が自分のことをどう思つているのかなんて、読み取る力は俺にはない。

きっと、そういう力のない者が、鬼へと墮ちてしまうんだろう。他人がどう思つているかなんて気にも留めない、自分のことしか考えられない生き物。存在しては、いけない、生き物。

「竈門炭治郎——おまえは俺のことを、存在してはいけない生き物だと、そう思うか？」

——果たして、今の俺は。

竈門炭治郎の目に、そうではないものとして、映つているのだろうか？

——最初に匂いを嗅いだときは、炎にも満たないと思つていた。

火というよりも、煙のような焦げ臭さ。弱々しく、濛々としていて、今にも消えてしまいそうな灰色の男。そんな印象を、竈門炭治郎は茂生大志郎に抱いていた。

「竈門炭治郎——おまえは俺のことを、存在してはいけない生き物だと、そう思うか？」

けれど、今。

この人の心は、燃えている。

今の自分は人間だと、全力で主張するように、力強い眼差しで炭治郎を見据えている。

刃を突きつけられているようだと、思った。この問いかけはきっと、大志郎なりの戦いなのだ。全てを投げ出し、逃げ出そうとしたかつての自分に、けじめをつけるための。それならば——炭治郎もまた、この問い合わせから逃げることなど赦されない。

「——思いません」

だから、応えよう。

この人の心に住み着いた、後悔という名の鬼を今、斬り捨てよう。

これが竈門炭治郎の、生涯最後の、鬼狩りだ。

「大丈夫ですよ。わざわざ確かめたりしなくたって、大志郎さんは人間です。だから——どうか、正しいと思う道を進んでください。大志郎さんを悪く言う人がいたら、俺が頭突きします」

「それは止めた方がいいよお兄ちゃん」

「なんでそこでおまえが水を差すんだ禰豆子!?」

「知らないの？ お兄ちゃんの頭つてすつごく固いんだよ？ 普通の人気が頭突きなんてされたら頭が割れちゃうよ。鬼だつた頃の私も危うくそうなるところだつたんだから」「お兄ちゃん禰豆子に頭突きした覚えなんかないぞ!?」

「……ははっ」

その時。

炭治郎と禰豆子のやり取りを眺めていた茂生大志郎が、堪え切れないと言わんばかりに、笑い声を漏らした。

そんな彼の、何の屈託もない笑顔を見て、炭治郎は思った。

——うん。

やつぱりもう、この人は、大丈夫だ。

心の炎が消えてしまいそうになる瞬間。そんな場面は、炭治郎にも幾らだつてあつた。鬼に家族を殺されたとき。どうか妹を殺さないでくださいと、富岡義勇に頭を下げたとき。半年経つても岩が斬れずに、鎧兎に打ちのめされたとき。折れた肋が痛くて痛くて堪らなかつたとき。そして――

『――悔しいなあ。何か一つできるようになつても、またすぐ目の前に分厚い壁があるんだ』

『凄い人はもつとずっと先のところで戦っているのに、俺はまだそこに行けない』

『こんな所でつまずいてるような、俺は――俺は……煉獄さんみたいになれるのかなあ

……』

——自分の弱さを、無力さを、思い知つたとき。
だから。

竜門炭治郎は、茂生大志郎のことを、自分とにん同じ存在在んだと思つたのだ。

「兄妹水入らずの邪魔して、悪かつたな。——ありがとう、もう行くよ」
「——大志郎さん！」

そんな人に。

何かを繋ぎたいと、思つた。

ひよつとしたら、余計なお世話なのかも知れない。自分がわざわざ後押ししなくて
も、この人は既に煉獄さんから自分と同じものを貰つてゐる。心を燃やせという、己を
鼓舞するための言葉を、知つてゐる。

だから——これ以上は、重荷になつてしまふのかも、しれない。

「……もしもまた挫けそうになつた時は、俺が今から叫ぶ言葉を、思い出してみて下さ
い」

「……叫ぶのか？」

「はい。叫びます」

それでも。

一度は逃げ出してしまつたと、心が折れてしまつたと、後悔を口にしたあなただからこそ。

折れてる大志郎も凄いんだと、そう言えるようになるための力を、授けてあげたかつた。

すう——と息を吸い込んで、肺に空気を流し込む。瓢箪を割つた時のように、丹田に

意識を集中させる。

そして。

竈門炭治郎は、その言葉を、唱えた。

「頑張れ大志郎頑張れ！　あなたの心に火は点いた！　貴方はできる人だ!!」

「――」

「そして今日も！　これからも！――折れていても！」

一度は折れた心でも。消えてしまつた炎でも。
俺達は、何度だつて、燃え上がる筈だから。

「あなたが挫けることは絶対にない!!」

だから。

あなたはきっと、大丈夫です。茂生大志郎さん。

「……折れてはいても挫けないって、言葉遊びも甚だしいな
「うぐつ……!?」

想像以上に素の突っ込みが返ってきて、それこそ心が折れそうになる炭治郎。
や……やはり無理があつたか……そりやそうだよな、元は心じやなくて骨の話だもん
な、折れていてもつて……だけどこう、何ていうか、心なんて一度や二度折れたくらい
じゃどうつてことないっていうか、そういう心意気的なものを伝えたかつたというか

……

——などと、しどろもどろになつていた炭治郎の額を、大志郎の人差し指がバチンと弾いた。

「痛え!!」

悲鳴を上げたのは大志郎の方であつた。

「大丈夫ですか!?」どうして俺はいま額を弾かれたんですか!?

「クソ、本当にめちゃくちや固え——大丈夫ですかじやねえよ、人を励まそうとした傍からこんな突つ込みでしょげてんじやねえよつて、そういう意味で一発入れたんだよ……あー痛え、これ本当に折れたかもしけん」

「大丈夫ですか!?」

「大丈夫だよ」

身を乗り出しかけた炭治郎を制止するように、茂生大志郎はひらひらと手を振り、踵を返した。今までの彼とはどこか異なる、飄々とした仕草だった。

「折れたくないじや挫けないって、言つてくれたもんな。おまえが」「……！」

——通じていた。

竈門炭治郎の言葉を、茂生大志郎はしつかりと、背負い込んでくれたのだ。

「……頑張るよ、俺。自分に何が出来るのか、何がしたいのかも、よくわかつてないけど
——」

部屋の扉に手を掛ける直前、大志郎は一度、こちらを振り返つて。

「——何度だつて、心を燃やして、頑張つてみる」

最後は少し、照れ臭そうにはにかんで。

茂生大志郎は、竈門炭治郎の前から、去つていった。

——さてと。

これから先、どうしようか。『正しいと思う道を進んでください』と、炭治郎は言つて
いたが——今までずっと剣を振ることしかしてこなかつた人間が、急にそれ以外の道を
歩むとなると中々難しい。他の隊士たちは一体、どのような未来予想図を描いているの
だろう？ その辺りも炭治郎に相談しておけば——

……いや、そうか。

余りにも色濃く浮き出ていたから逆に忘れててしまつていたが、竈門炭治郎もまた、短
命の癌を持つ者なのだ。

それなのに、あいつときたら、よくもまあ——

『あなたが挫けることは絶対にない!!』

……そんな暗さを微塵も見せずに、人の背中を押してみせやがつて。

本当に、凄いやつだよ、おまえは。

「……頑張ろう」

そうだ。

そんなやつが、『貴方はできる人だ』なんて、言つてくれたんだから。
辛くつたつて、悲しくつたつて、落ち込んでなんかいられない。

あいつの言葉に恥じない自分に、ならなくつちやいけないんだ、俺も。

『重いな！　だからこそ背負い甲斐がある！』

……なるほどね。

少しだけ、あなたの気持ちが理解出来たような気がするよ。煉獄さん。

人に何かを託される、繋いでいくつていうのは——こういうことなんだな、きっと。

「……随分とまあ、吹つ切れた顔になつたものだな」

「あ」

竈門兄妹の持ち部屋を出て少し歩いた途端、見知った顔に出会つた。と言つても、ほ

んの二日前に顔を合わせたばかりの相手なのだが。

愈史郎だ。足元に飼い猫を侍らせて、廊下の壁に背中を預けて腕を組んでいた。こいつが日中に出歩いているのは珍しい。いや、珍しいと言つてもほんの二日前に以下略。

……というか、そうだ。先のことを考えるよりも前に、今の俺はこいつの小間使いを務めているのだった。怪我人だつてまだ大勢この屋敷に詰めているというのに、浮足立つて自分のことばかりを考えて、全然成長していないじやないか茂生大志郎。反省しろ反省。後悔は程々にするにしても反省だけはきちつとしろ。

「悪い。ちょっと野暮用を済ませてた」

「頑張れ大志郎頑張れ——おまえがそんな名前だつたとは知らなかつたな」

「……聞いてたのか？」

『聞こえてきた』だ、馬鹿が。誰がおまえらの会話なんぞに聞き耳を立てるものか

それもそうだ。というか確かに、あの時の炭治郎の声は馬鹿みたいに大きかつたな。

今頃、神崎アオイあたりが部屋へと押し入つて『静かになさつてください!!』と炭治郎を叱りつけていてもおかしくはない。それとも今は猪の世話で忙しいかな。確か今、彼女の主な受け持ちは嘴平伊之助だつた筈だから。

「——で、おまえはこんな廊下の端っこで何やつてんだ？ こちら辺は窓が無いから平氣だけど、まだおまえが出歩くには早い時間だろ」

「……今日にでも屋敷を発とうと思つてな。あの兄妹にはそれなりに縁があるから、最後に顔だけでも見ておこうかと思つたんだが——どこぞの先客のせいで氣勢を削がれた。大人しく夜に時間を改める」

「あれ、もう出て行くのか？ まだ全然治り切つてない奴が殆どだぞ」

「誰が完治するまで面倒を見るなんて言つた。……処置を施さなければ助からなそうな奴には全員手を付けた。後は屋敷の娘たちだけでも何とかなるだろう」

「ふーん……？」

……なんだろう。本当にそれだけだろうか？ 何處か投げやりな感じに見えるのは俺の気のせいなんだろか。

炭治郎とか我妻だつたら、こいつが何を考えてるのか理解わいかるのかな。俺には見ただけで、こいつの考えを察することなんて出来ない。今までずっと、本氣で他人と向き合つてこなかつたから。

——だからこれは、てんで的外れな直観なのかもしないけれど。何となく、今のこいつを一人にしては、いけないような気がした。

「——なあ。おまえはこれから先、どうするんだ?」

「……馬鹿か? 屋敷を発つと言つたばかりだろう、歩きもせずに記憶を飛ばすな、鳥以下頭め」

「本当に口わつるいなこいつ……! そうじやねえよ、屋敷を出た後のことだよ! 何かやりたいこととかないのかよ?」

「……知るか」

「いや、知るかつておまえ」

「どうでもいい。……俺が生き続ける理由など、最早この世には何もないんだ。茶々丸に住処でも用意してやつたら、その後は——」

……その後は? 続く言葉を待つていたのだが、愈史郎はそれつきり口を噤んでしまった。何も考えていないのか、或いはもう、そこで全てを終わらせるつもりなのか。生きろよ、と俺は言おうとした。けれどその後に、こうも思った。
いつまでだ?

愈史郎は一体、いつまで生き続ければいい？

愈史郎は鬼だ。たとえ心は人間であつても、体質は限りなく不老に近い不死だ。太陽の光を浴びない限り、こいつが命を落とすことなどあり得ない。それは即ち、愈史郎は自身が望む限り、永遠に生き続けることが可能だとということを意味している。
 逆に言えば——こいつが自分の人生を終わらせるには、自らの手で幕を下ろす以外の方法がないのだ。そんな相手に、ただ理由もなく生き永らえろとだけ口にするのは、無責任なのではないだろうか。終わりにするという選択肢も、こいつには残しておくべきなのではないだろうか——

『——いえ、意味がないなんてことはない筈です。続けましょう』

……そうだな。

それは流石に、早急に過ぎる結論か。

生きる理由がないというなら、用意してやればいいだけの話だ。終わりにするかどうかを決めるのは、それからだつて遅くはないだろう。

あいつなら——炭治郎ならもつと、違う理由を思いつけるのかもしれないが。せつかくだから俺は、もう少しだけ、我儘な理由でこいつを引き留めさせてもらう。

『俺を、ここから、引っ張り出せ』

——ふてぶてしくもそんなことを言つて、俺を人間に繋ぎ止めやがつた野郎に。
それと同じくらいの図々しさで、言つてやるのだ。

「——やることないんだつたらさ、一つ頼まれてくんないかな」「……何？」

「俺、もつと本格的に、人の手当ての仕方とかを学んでみたいと思うんだよ」「……医者でも目指すつもりなのか？ 俺は野巫やぶだぞ、本職じやない。第一、なんでおまえ如きのために俺がそんな面倒を引き受けなければならぬんだ」

「まあそう言わずにさ、ちょっとした暇潰しだと思つて」

「その程度の期間でまともな腕が身に付くとでも思つているのか？ 素人が一から学ぼうと思つたら数年、或いは十数年——」

「それでも、暇潰しみたいなもんだろ。おまえにとつてはさ」

あつけらかんと言い放つと、流石の愈史郎も絶句した。そりやそうだよな、自分で

言つてて厚かましいにも程があるつて思うし。

でもな、愈史郎。これだけは覚えておけよ。

人をこの世に繋ぎ止めたからには、繋ぎ止められる覚悟もしておけつてことだ。

「な？　いいだろ？　ちょっとした寄り道だと思つてさ、付き合つてくれよ。数年か十
数年くらい」

「ふざけるな。冗談じやない、誰がおまえのような醜——」

心底嫌そうに顔を顰めていた愈史郎が、不意に目をぱちくりとさせて、何かを見定め
るよう俺の顔をじろじろと眺めてくる。

「……何だよ。また人のこと、醜男とか何とか言うつもりか？」

「——いや」

愈史郎は深々と溜息を吐き、徐に足元の猫を抱き上げて。
明後日の方向を向きながら、一言。

「——今のおまえの顔は、人間だよ」
平凡

「……なんだ、そりや？」

……まあ、別にいいか。平凡だろうが、何だろうが。

醜男おにだなんて呼ばれるよりかは、多少はマシなものになれたみたいだから。

惨めな小鬼ヘタレモブの物語は、これにてお開きです。
ちゃんちゃん。